

清武町埋蔵文化財調査報告書 第20集

Y A M A D A

山田第2遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

2006

清武町教育委員会



巻頭図版1 山田第2遺跡全景(西から)



巻頭図版2 SC-68(北から)

序

本書は、清武町船引地区で進められている県営農地保全整備事業に伴い、平成11年度に実施した山田第2遺跡における埋蔵文化財発掘調査についての報告書です。

本調査では、猪や鹿などを捕らえるための“陥し穴”や“石の罅”、そしてその手に入れた食物を燻して長期保存を可能にした“炉穴”など、食に関する遺物や遺構が数多く発見されました。これらの資料はいずれも今から約9,000年前から約7,000年前のいわゆる縄文時代早期と呼ばれる時期のものですが、町内船引地区遺跡群ではこの時期の資料の発見が相次いでおり、その質・量の豊富さは全国トップクラスといっても過言ではありません。

今後、これらの貴重な文化遺産が、先人達の生きる知恵として21世紀を担う子供達へ確実に継承されるとともに、環境破壊や地域紛争の絶えない現代社会に一石を投じ、急ぎすぎない真の意味での心豊かな世界の創造に寄与することができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力を頂きました船引土地改良区をはじめとする地元の皆様並びに関係各局に対し、心より厚く御礼申し上げます。

清武町教育委員会

教育長 水元 三千夫

例 言

1. 本書は、県営農地保全整備事業(船引工区)に伴い、平成11年度に実施された山田第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査における測量・実測については、井田篤・松原一哉及び実測補助員が行った。
実測補助員： (50音順)
3. 遺物・図面の整理及び報告書作成業務については、一部を平成11年度に清武町文化財管理事務所で行い、残りを平成17年度に清武町埋蔵文化財センターで行った。

平成11年度

担 当：井田、松原 整理作業員： (50音順)

平成17年度

担 当：井田、秋成雅博、若杉知和
整理作業員：

(50音順)

4. 本書で使用した写真については、調査に関するものは井田・松原が撮影し、報告書掲載遺物については井田・秋成が撮影した。又、空中写真については(株)スカイサーベイに委託した。
5. 放射性炭素年代測定及び樹種同定については、(株)古環境研究所に委託した。分析結果については、本書P68・69に掲載している。尚、本書で使用している放射性炭素年代測定値については、加速器質量分析法による補正¹⁴C年代である。
6. 石器実測及びトレースについては、秋成・若杉及び整理作業員で行った。但し、石器実測については一部を岡三リピック株式会社埋蔵文化財調査室に委託し、また石器実測図のトレースについては一部をアイシン精機株式会社新規事業企画室に委託した。なおこれらの委託業務の監修については秋成が行った。
7. 本書で使用した土層及び土器等の色調については、『新版 標準土色帖(1997年後期版)』の土色に準拠した。
8. 本書では、磁北と座標北の2種類の方位を使用している。(座標北を用いる場合のみGNと表示している。)又、標高については海拔絶対高である。
9. 本書に使用した記号は次のとおりである。
SI：集石遺構 SC：土坑(炉穴・陥し穴も含む)
10. 本書の執筆と編集については井田・秋成が担当し、文責については本文目次に記している。
11. 出土遺物その他諸記録は、清武町埋蔵文化財センターに保管している。

目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査組織	1	(文責 井田)
1. 調査に至る経緯	1	(")
2. 調査組織	1	(")
第2節 遺跡の環境	1	(")
1. 地理的環境	1	(")
2. 歴史的環境	2	(")
3. 周辺遺跡	2	(")
第3節 調査の経過と方法	4	(")
1. 調査の経過	4	(")
2. 調査の方法	4	(")
第4節 基本土層	5	(")

第II章 アカホヤ上面についての調査

第1節 土坑	6	(文責 井田)
第2節 遺物	22	(文責 井田・秋成)
1. 土器	22	(文責 井田)
2. 石器	23	(文責 秋成)

第III章 縄文時代早期についての調査

第1節 遺構	27	(文責 井田)
1. 集石遺構	27	(")
2. 炉穴	29	(")
3. 陥し穴	31	(")
第2節 遺物包含層出土遺物	39	(文責 井田・秋成)
1. 土器	39	(文責 井田)
2. 石器	55	(文責 秋成)

第IV章 まとめ

山田第2遺跡と坂元遺跡における炉穴の比較	66	(文責 井田)
桑ノ木津留産黒曜石の利用について	67	(文責 秋成)
山田第2遺跡における自然科学分析 <small>《(株)古環境研究所》</small>	68・69	
調査抄録	70	

挿図目次

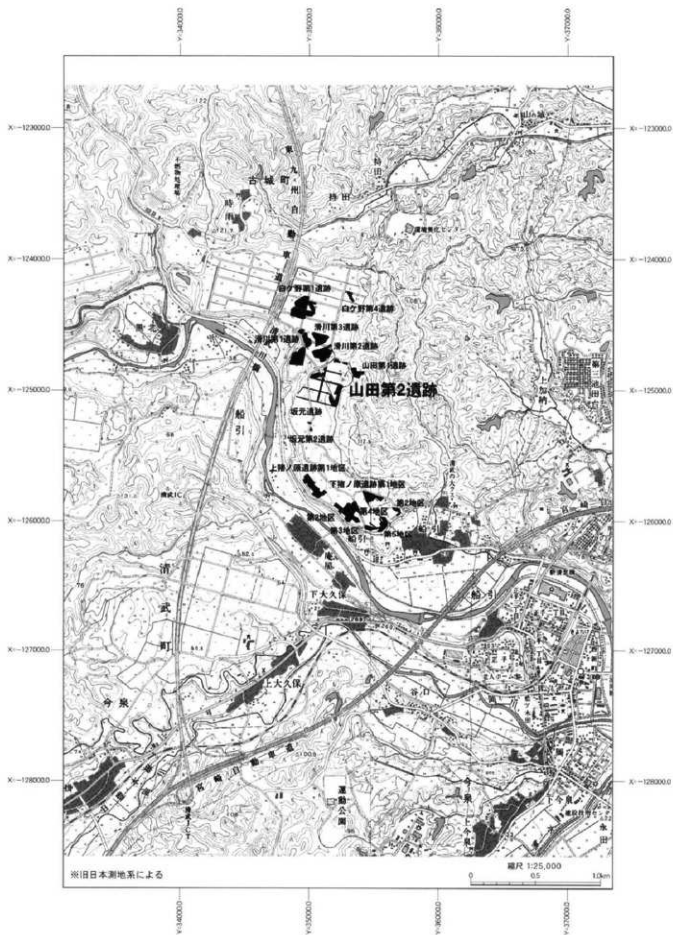
第1図	位置図 (S=1/25,000)	
第2図	遺跡周辺地形図 (S=1/2,000)	3
第3図	基本土層図 (S=1/30)	5
第4図	アカホヤ上面検出遺構配置図及び遺物分布図 (S=1/400)	7
第5図	アカホヤ上面検出土坑実測図① (S=1/30)	9
第6図	アカホヤ上面検出土坑実測図② (S=1/30)	10
第7図	アカホヤ上面検出土坑実測図③ (S=1/30)	11
第8図	アカホヤ上面検出土坑実測図④ (S=1/30)	12
第9図	アカホヤ上面検出土坑実測図⑤ (S=1/30)	13
第10図	アカホヤ上面検出土坑実測図⑥ (S=1/30)	14
第11図	アカホヤ上面検出土坑実測図⑦ (S=1/30)	15
第12図	アカホヤ上面検出土坑実測図⑧ (S=1/30)	16
第13図	アカホヤ上面検出土坑実測図⑨ (S=1/30)	17
第14図	アカホヤ上位遺物包含層出土土器実測図 (S=1/3)	22
第15図	アカホヤ上位遺物包含層出土土器実測図① (S=2/3)	24
第16図	アカホヤ上位遺物包含層出土土器実測図② (S=2/3・1/2)	25
第17図	集石遺構実測図 (S=1/30)	27
第18図	縄文時代早期遺構配置図及びコンタ図 (S=1/400)	28
第19図	炉穴実測図① (S=1/30)	29
第20図	炉穴実測図② (S=1/30)	30
第21図	陥し穴実測図① (S=1/30)	31
第22図	陥し穴実測図② (S=1/30)	32
第23図	縄文時代早期遺物包含層出土遺物及び出土礫分布図 (S=1/250)	40
第24図	縄文時代早期遺物包含層出土土器分布図① (S=1/250)	43
第25図	縄文時代早期遺物包含層出土土器分布図② (S=1/250)	44
第26図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図① (S=1/3)	45
第27図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図② (S=1/3)	46
第28図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図③ (S=1/3)	47
第29図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図④ (S=1/3)	48
第30図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図⑤ (S=1/3)	49
第31図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図⑥ (S=1/3)	50
第32図	縄文時代早期遺物包含層出土主要石器分布図 (S=1/250)	56
第33図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図① (S=2/3)	57
第34図	縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図② (S=2/3・1/2)	58

図版目次

巻頭カラー① 山田第2遺跡 全景 (西から)	図版31 SC-70① (南西から).....37
巻頭カラー② SC-68 (北西から)	図版32 SC-70② (西から).....37
図版1 基本土層 (西から).....5	図版33 SC-70③ (西から).....37
図版2 アカホヤ上面検出土坑群 (西から).....20	図版34 SC-70④ (南西から).....37
図版3 SC-23① (北から).....20	図版35 SC-77① (南東から).....37
図版4 SC-23② (北西から).....20	図版36 SC-77② (南西から).....37
図版5 SC-4① (西から).....20	図版37 SC-71 (南西から).....38
図版6 SC-4② (北西から).....20	図版38 SC-72 (南東から).....38
図版7 SC-4③ (北西から).....20	図版39 SC-73 (南東から).....38
図版8 SC-1 (北東から).....21	図版40 縄文時代早期遺物包含層出土石器①.....60
図版9 SC-20 (南西から).....21	図版41 縄文時代早期遺物包含層出土石器②.....61
図版10 SC-46 (北西から).....21	図版42 縄文時代早期遺物包含層出土石器③.....62
図版11 SC-29 (南西から).....21	図版43 縄文時代早期遺物包含層出土石器④.....63
図版12 SC-48 (北から).....21	図版44 縄文時代早期遺物包含層出土石器①.....64
図版13 SC-50 (北から).....21	図版45 縄文時代早期遺物包含層出土石器②.....65
図版14 アカホヤ上位遺物包含層出土石器.....23	
図版15 アカホヤ上位遺物包含層出土石器.....26	
図版16 SI-1 (南から).....33	
図版17 SI-2 (北西から).....33	
図版18 SC-68 (北から).....33	
図版19 SC-69① (北から).....34	
図版20 SC-69② (南西から).....34	
図版21 SC-69③ (南から).....34	
図版22 SC-69④ (北から).....34	
図版23 SC-74① (北東から).....35	
図版24 SC-74② (北東から).....35	
図版25 SC-74③ (北から).....35	
図版26 SC-75① (南から).....35	
図版27 SC-75② (南から).....35	
図版28 SC-76① (東から).....36	
図版29 SC-76② (南東から).....36	
図版30 SC-76③ (南東から).....36	

表目次

第1表 アカホヤ上面検出土坑観察表.....	18・19
第2表 アカホヤ上位遺物包含層出土石器 観察表	22
第3表 アカホヤ上位遺物包含層出土石器 計測分類表	25
第4表 集石遺構観察表.....	27
第5表 炉穴観察表.....	29
第6表 陥し穴観察表.....	31
第7表 縄文時代早期遺物包含層出土石器 観察表	51~54
第8表 縄文時代早期遺物包含層出土石器 計測分類表	67



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と調査組織

1. 調査に至る経緯

平成7年度より実施されている県営農地保全整備事業(船引工区)に伴い、事業区に山田第2遺跡の一部が含まれることが明らかになった。遺跡の取扱いについて、宮崎県教育委員会、宮崎県中部農林振興局、船引地区土地改良区、清武町教育委員会等関係各局で協議したところ、やむを得ず削平などにより遺跡の現状保存が困難な事業区について、宮崎県中部農林振興局からの委託を受け、清武町教育委員会が発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成11年4月28日～平成12年3月30日で、調査面積は約4,300㎡である。

2. 調査組織

調査主体 清武町教育委員会

平成11年度

事務局	
教 育 長	湯地 敏郎
教 育 次 長	清 俊郎
社会教育課長	谷口 紘一
社会教育課文化係長	川越 健
社会教育課主任	伊東 但

平成17年度

事務局	
教育長(～H17.10)	神川 孝志
(H17.10～)	水元 三千夫
教育次長	古城 員久
生涯学習課長	落合 兼雄
生涯学習課補佐	長友 眞一
生涯学習課係長	伊東 但

調査員

社会教育課主事	井田 篤
社会教育課嘱託	松原 一哉

調査員

生涯学習課主任	井田 篤
生涯学習課主事	秋成 雅博
生涯学習課嘱託	若杉 知和
生涯学習課嘱託	今村 結記

第2節 遺跡の環境

1. 地理的環境

清武町は、県内最大の宮崎平野の南端に位置し、県都宮崎市の南西に隣接している。町内ほぼ中央には清武川が東流し、河川周辺には沖積地や河岸段丘がみられ、その上位には台地が発達している。この台地は、大淀川南岸丘陵とよばれる四万十層群からなる標高200m

～400m丘陵が、高岡方面から東に向かってしだいに低くなり平坦な台地地形へと変化したもので、地質は宮崎平野の基盤である宮崎層群の上位にシラスや火山灰等が堆積して形成されたものである。

山田第2遺跡は、この台地の標高105m～100mの丘陵尾根部からの緩斜面に立地し、山田第1遺跡・滑川第1～3遺跡を西に見下ろしており、その立地条件は近隣の白ヶ野第4遺跡によく似ている（「清武町埋蔵文化財調査報告書 第13集 白ヶ野第1・第4遺跡」参照）。

2. 歴史的環境

山田第2遺跡は、清武町内船引地区に所在する。船引の名が歴史上に登場するのは古代末から中世にかけてである。建久八(1197)年鎌倉幕府が各国の現地役人に命じて作成させた『建久の図田帳』には、「船曳五十町、右宮崎郡内 弁済使法印、不知實名、とあることから、平安末には宇佐八幡宮と強い結びつきをもった荘園がこの地に存在したことが明らかである。

室町・戦国期においては、この地は主に伊東氏の所領であったが、豊臣秀吉の九州征伐後高橋元種の所領となり、江戸時代初期には幕府領(天領)となっている。加納・木原・今泉といった清武町内の他の地区は、秀吉により伊東祐兵に与えられ江戸時代を通して飫肥藩領であったため、現在の清武町においては船引地区だけが異なる支配体制のもと近世という時を刻んだこととなる。

明治維新後は、船引村として清武郡治所の管轄下となり、明治24(1891)年には清武村、昭和25(1950)年には清武町の一地区として、現在も発展を続けている。

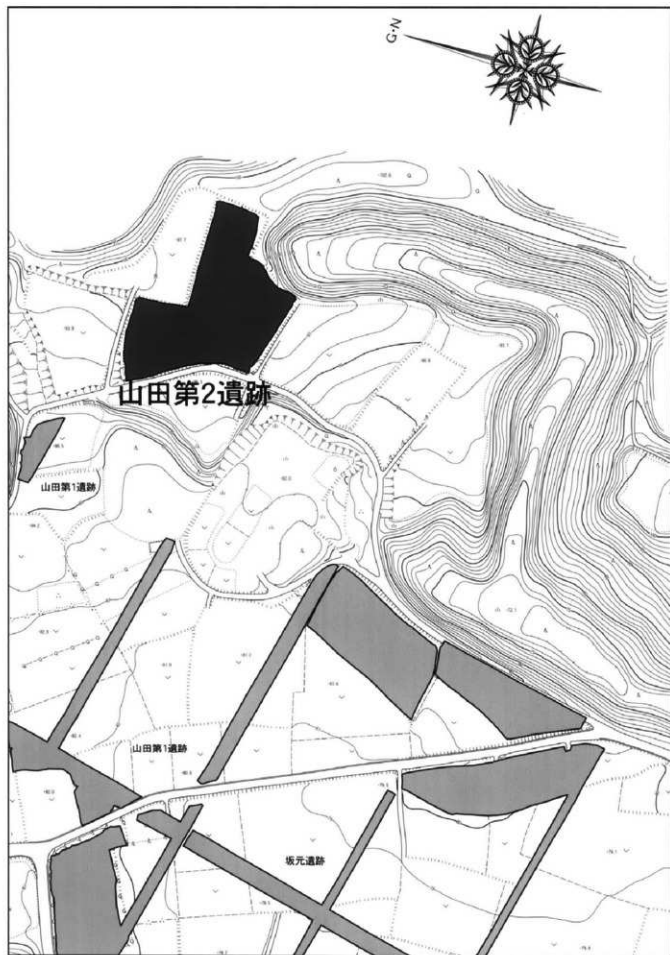
又、江戸時代中期には定着していた“船引神楽”は、主に稲作豊穰と子孫繁栄を祈願して春(春分の日)に奉納される作祈禱神楽であるが、数多くの番数が今も尚伝承されていることから、県の無形民俗文化財に指定されている。

3. 周辺遺跡

山田第2遺跡が立地する台地上では、平成3年頃から県営農地保全整備事業(時屋工区)、東九州自動車建設、県営農地保全整備事業(船引工区)などの大型公共工事が相次いでいる。

それに伴い発掘調査が実施された遺跡は20遺跡を数え(平成17年度現在)、旧石器から近世までの貴重な資料が多数確認されている。特に、台地上という地形からか、狩猟・採集を主な生業としていた縄文時代早期の遺構・遺物がすべての遺跡で確認されている。

近隣には宮崎県教育委員会主体によって調査が実施され、縄文時代後期及び古墳時代中期の竪穴式住居跡などが検出された上ノ原第1～4遺跡、竈を有する竪穴式住居跡の発見により当台地上で営まれた古代の小規模集落の存在が明らかとなった白ヶ野第2・3遺跡、又、清武町教育委員会によって調査された坂元第1・2遺跡、滑川第1～3遺跡などが所在している。



第2図 遺跡周辺地形図(S=1/2,000)

0 100(m)

第3節 調査の経過と方法

1. 調査の経過

調査は、重機による表土剥ぎ取り後、耕作による削平状況の確認作業から開始した。その結果、調査区は、アカホヤ火山灰層残存部、縄文時代早期遺物包含層露出部、シラス層露出部に大別できたため、まずアカホヤ火山灰層残存部についての調査を行い、その後縄文時代早期の文化層についての調査を行った。

アカホヤ火山灰層上面では、端部にピットを有する土坑等が多数検出されたため、それらの記録作業を行い、終了後アカホヤ火山灰層を重機により剥ぎ取った。アカホヤ火山灰除去後は、アカホヤ降下軽石層直下での等高線の確認作業を行い、縄文時代早期の旧地形復元を試みた。その後、縄文時代早期の文化層を掘り下げ遺物の取上げ作業を行ったが、その途中で集石遺構が検出されたため集石遺構の記録作業も併せて行った。次に縄文時代早期の遺構の検出作業を、霧島・小林火山灰層上面で行ったところ、炉穴・陥し穴が検出されたため両遺構の記録作業を行った。又、シラス層露出部においても陥し穴や土坑が検出されたため、先述の両遺構の記録作業と併せて行った。

2. 調査の方法

表土等の剥ぎ取り：調査員の指示のもと重機を使用して実施した。

基準杭等の設定：前年度のデータを参考にし、光波測量器を用いて調査員が実施した。

検出面での精査：アカホヤ火山灰層上面において縄文時代前期以降の遺構検出作業を行い、次に霧島・小林軽石火山灰層上面で縄文時代早期・草創期の遺構検出作業を行った。ただし集石遺構については、遺物包含層の掘り下げ作業の最中に検出している。

遺物包含層の掘り下げ作業：主にジョレン・ねじり鎌で行なった。包含層中に存在する遺構の検出作業も兼ねているので、一枚一枚包含層を剥ぐ意識を作業員に徹底させ丁寧にを行った。

遺構実測：遺構のサイズに応じて1/10又は1/20で作図した。

測量関係：光波測量器及びデータコレクタを使用し、現場でデータを収集した後、清武町文化財管理事務所(現清武町埋蔵文化財センター)において、AUTOCADを利用してデジタルデータとして管理した。

写真撮影：6×6・6×9版モノクロ・リバーサル、35mmモノクロ・リバーサル写真を併用し空中写真については業者に委託した。

第4節 基本土層

② ～ ③：極わずかではあるが弥生時代から古代の遺物が出土した。

④鬼界アカホヤ火山灰層：縄文時代前期以降の遺構検出面。

⑤黒褐色シルト質ローム：縄文時代早期の遺物包含層(遺物及び焼礫が多数出土)。

※5層と6層については、両層の間に互いが縞状をなす層が確認され、その厚みについては傾斜のきつい範囲がより厚いという傾向が確認された。

⑥褐色シルト質ローム：縄文時代早期の遺物包含層(遺物及び焼礫が極めて多数出土)。

当層上位から中位にかけて、集石遺構が検出された。

⑧霧島・小林火山灰層：縄文時代早期の遺構最終検出面。

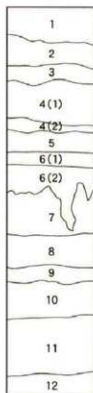
炉穴・陥し穴・土坑が検出された。

尚、本報告書で使用されている層位については、「第3図 基本土層図」の層位番号を使用している。



図版1 基本土層(西から)

1. 耕作土
2. 褐色シルト質ローム土
10YR4/6(褐色)と10YR3/4(暗褐)がしま状をなす。白色・黄色・褐色パミス及び炭化粒を全身的に含む。
3. 鬼界アカホヤ火山灰風化層
7.5YR5/8(明褐)
- 4(1). 鬼界アカホヤ火山灰層
7.5YR5/6(明褐)
- 4(2). 鬼界アカホヤ火山灰軽石層:米粒大
5. 黒褐色シルト質ローム層
10YR3/2(黒褐)
- 6(1). 6(2)に5がしま状にまざり混む
- 6(2). 褐色シルト質ローム層
10YR4/4(褐) やや軟質
7. 霧島・小林火山灰層
2.5Y3/2
8. 霧島・小林火山灰層
2.5Y4/2(明灰黄)
9. にぶい黄色ローム層
10YR4/3(にぶい黄色)
10. 褐色シルト質ローム層
10YR4/6(褐) やや軟質
11. 褐色シルト層
2.5Y4/4(オリーブ褐)
やや硬質で、シラスの小ブロックがまざり混む
12. シラス



第3図 基本土層図(1/30)

第Ⅱ章 アカホヤ層上位についての調査

アカホヤ火山灰層上位についての調査では、まず風化したアカホヤ火山灰層(通称:2次アカホヤ)から弥生時代～古代の遺物が種々かではあるが出土したため、出土地点の記録及び取上げ作業を行った。その後、アカホヤ火山灰層上面において遺構の検出作業を行ったところ、ピット及び土坑87基が検出された。ピットについては、掘立柱建物や柵などの痕跡の可能性を考慮して調査を行ったが、それを裏付けるような規則的な配置は確認できなかったため、個別の記録作業は行わず全体的な分布状況の記録のみにとどめることとした。

第1節 土坑

ピットと切り合っている土坑

ピットと切り合って検出された土坑は計80基である。

土坑とピットの関係については、時期の異なるものが偶然切り合っているのか、それともこの両者が切り合う構造が遺構の用途に重要な意味を持つのか、判断が困難であったため、埋土等に関して入念な調査を実施し両者の関係の解明に努めた。

① 1基の土坑に1つあるいは複数のピットが切り合って検出されたケース。

1基の土坑にピットが切り合っているケースは43基で、そのほとんどが土坑の端部にピットが切り合っている状況で検出された。ピットと土坑の関係については、新旧関係が埋土で明らかになったものが数ケース確認されたが、いずれも土坑を切る形でピットが構築されたのではないかと推測される埋土であった。但し、両者の埋土は基本的には同質なため(下記のSC-1の埋土参照)、ほぼ同時期に埋没した可能性も捨てきれず、この遺構の用途等の完全なる把握には至らなかった。

《SC-1の埋土》

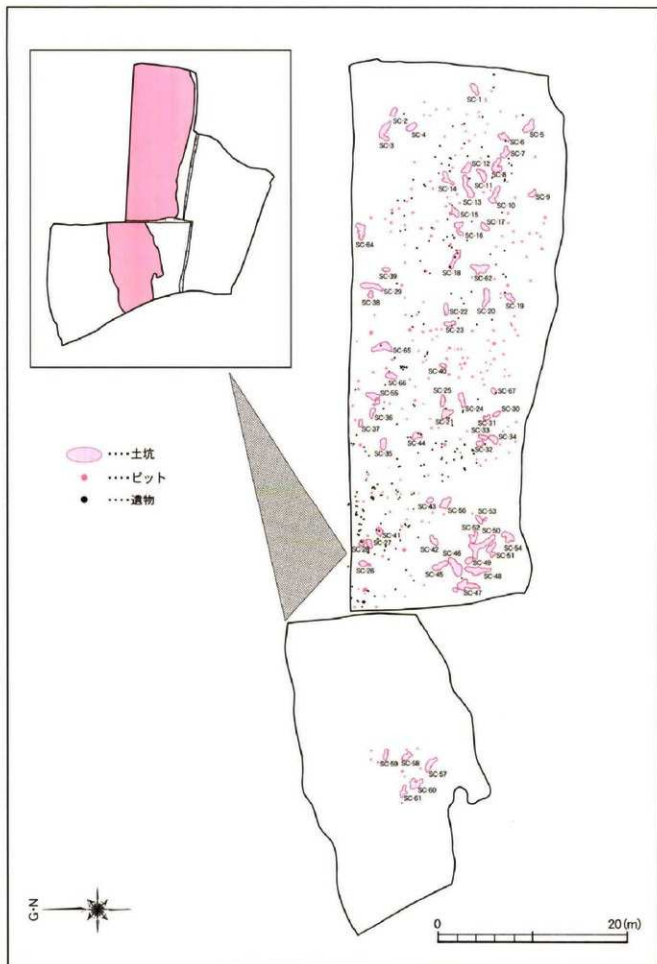
ピットの埋土:暗褐色(10YR3/4)シルト質ローム土。黄・白・橙色のパミス及び炭化粒を全体に含む。

土坑の埋土:ピットの埋土に、アカホヤ火山灰小ブロック(2mm～5mm)及び基本土層第5層の小ブロック(2mm～5mm)を20%程含む。

② 複数の土坑及びピットが切り合って検出されたケース。

複数の土坑及びピットが切り合うケースは、17グループ(土坑38基)検出された。切り合いの状況や埋土から推測すると、17グループのほとんどが先述の端部にピットを有する土坑の切り合いであると推測される。

切り合い状況としては、直線的・T字・くの字など様々な状況が確認されているが、なんらか



第4回 アカホヤ上面検出遺構配置図及び遺物分布図 (S=1/400)

の規則性があるとは考えにくい。又、土坑及びピットの新旧関係については、埋土が似かよったものがほとんどであったため不明なものが多かったが、SC-13等数グループについては、ピットと土坑の新旧関係のみは判断することが可能な状況であった(新旧関係については、土坑をピットが切っている)。

《SC-13の埋土》

ピットの埋土：暗褐色(10YR3/4)シルト質ローム土。黄・白・橙色のパミス及び炭化粒を全体に含む。

土坑の埋土：褐色(10YR4/6)シルト質ローム土と暗褐色(10YR3/4)シルト質ローム土が縞状をなす。

黄・白・橙色のパミス及び炭化粒を全体に含む。

以上、土坑の端部にピットが切り合っている遺構について述べてきたが、このタイプの土坑は近隣の白ヶ野第1遺跡や滑川第1遺跡でも検出されている。いずれの遺跡における立地条件も緩やかな谷部であるが、この立地条件とこの構造がこの遺構の性格を考察する上での重要な意味を持つのではないかと推測される。

ピットと切り合っていない土坑

ピットと切り合っていない土坑は、計7基検出された。

@ SC-21・30・33・60・43・79

この6基については、遺構の性格等を考察する手掛かりはほとんど確認することができなかった。埋土については、先述のピットと切り合っている土坑とほぼ同質であった。

@ SC-24

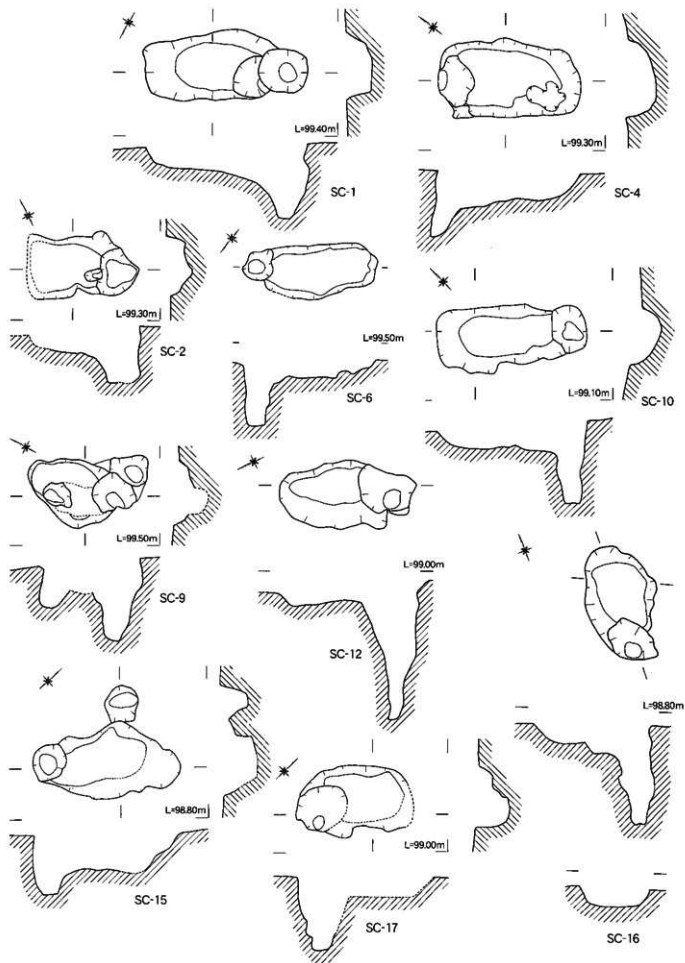
SC-24については、アカホヤ上面で検出された他の土坑とは構造上明らかに異なる特徴を有する。平面プランは長軸1.5m・短軸0.5mの長方形で、検出面からの深さは0.8mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

このタイプの土坑は、近隣遺跡でも数例確認されているが、まとまって検出されるケースはほとんどみられない。又、遺構の性格については、土坑のプランからみて貯蔵穴や陥し穴などが推測されるが、明確な用途を把握するには至っていない。

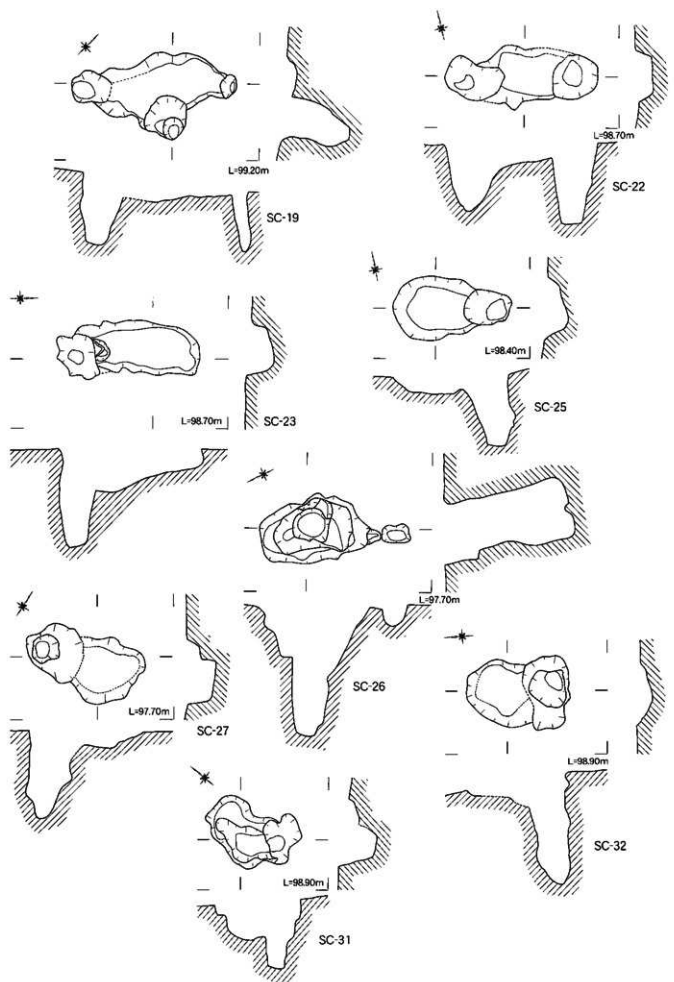
尚、土坑の埋土については以下のとおりである。

《埋土》

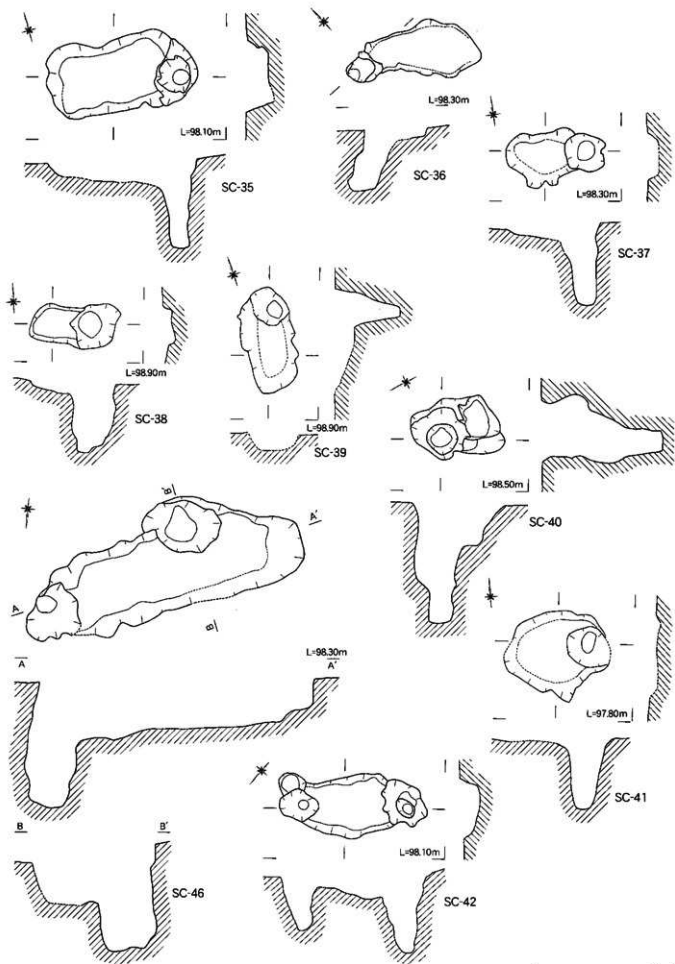
暗褐色(10YR3/4)シルト質ローム土に褐色(10YR4/6)シルト質ローム土がわずかに入り込む。白・黄パミスが埋土全体に含まれているが、埋土上位になるほどその密度は濃い(そのためか埋土下位はやや粘性が有る)。又、炭化粒を全体に含んでいる。



第5図 アカホヤ上面検出土坑実測図①(S=1/30)

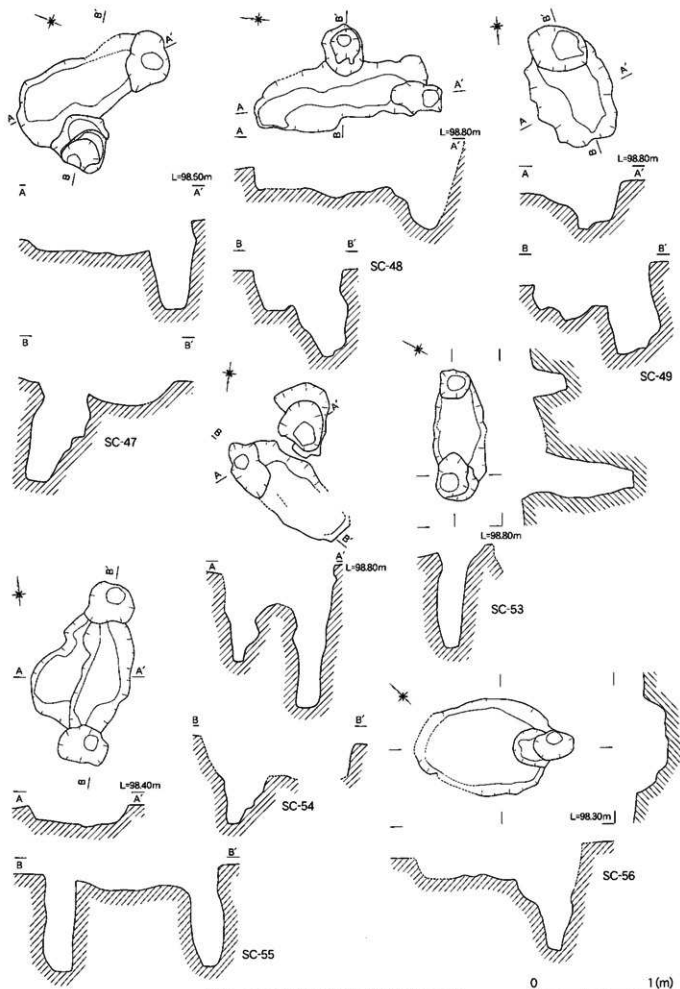


第6図 アカホヤ上面検出土坑実測図②(S-1/30)

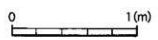


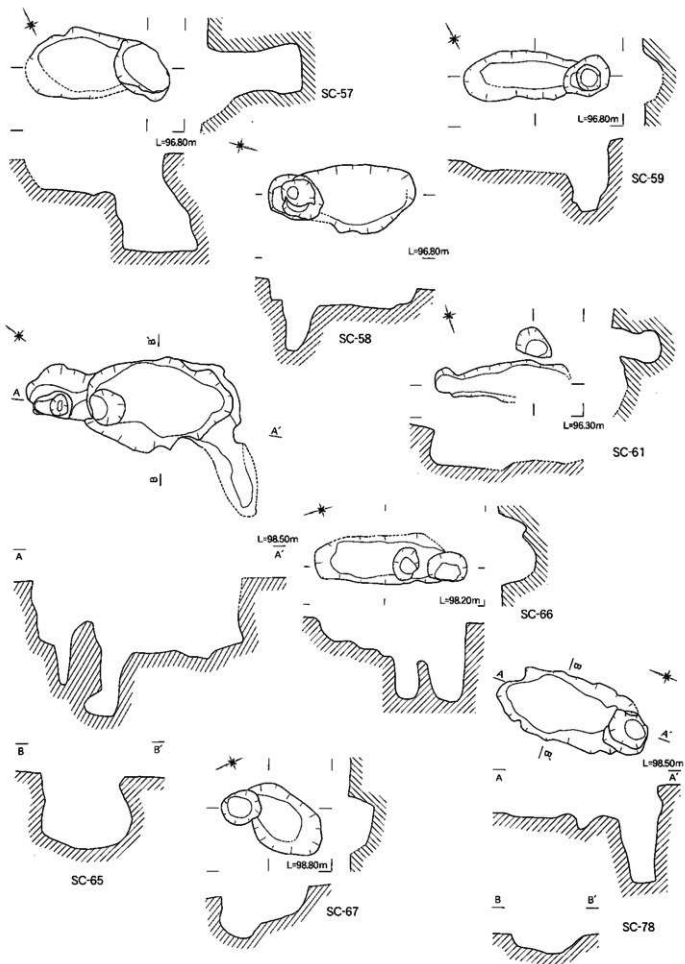
第7図 アカホヤ上面検出土坑実測図③(S-1/30)

0 1(m)

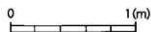


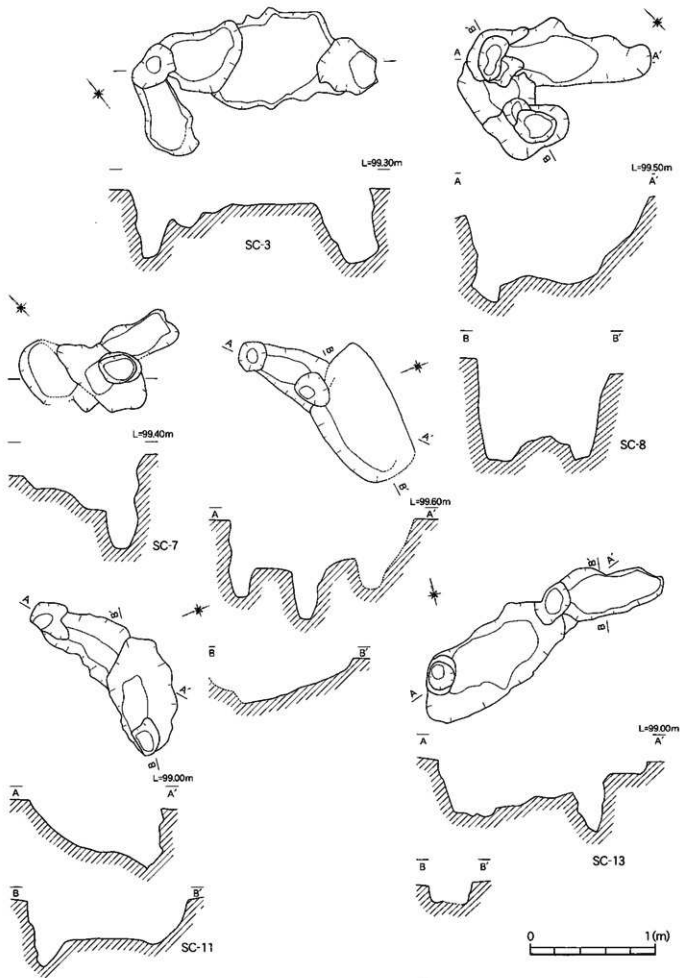
第8図 アカホヤ上面検出土坑実測図④(S=1/30)



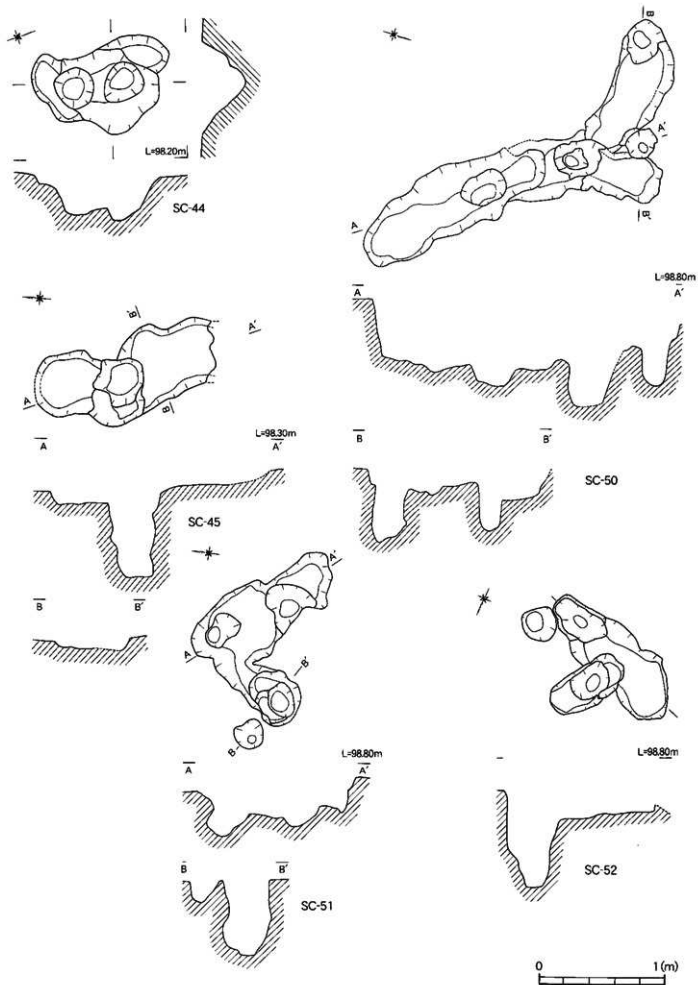


第9図 アカホヤ上面検出土坑実測図⑤(S-1/30)

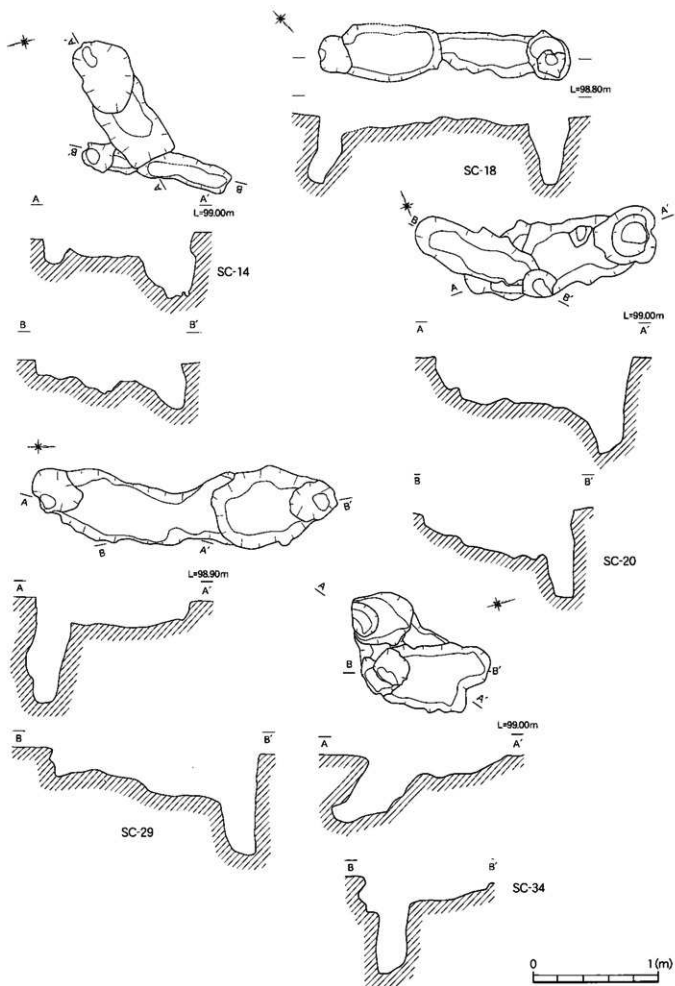




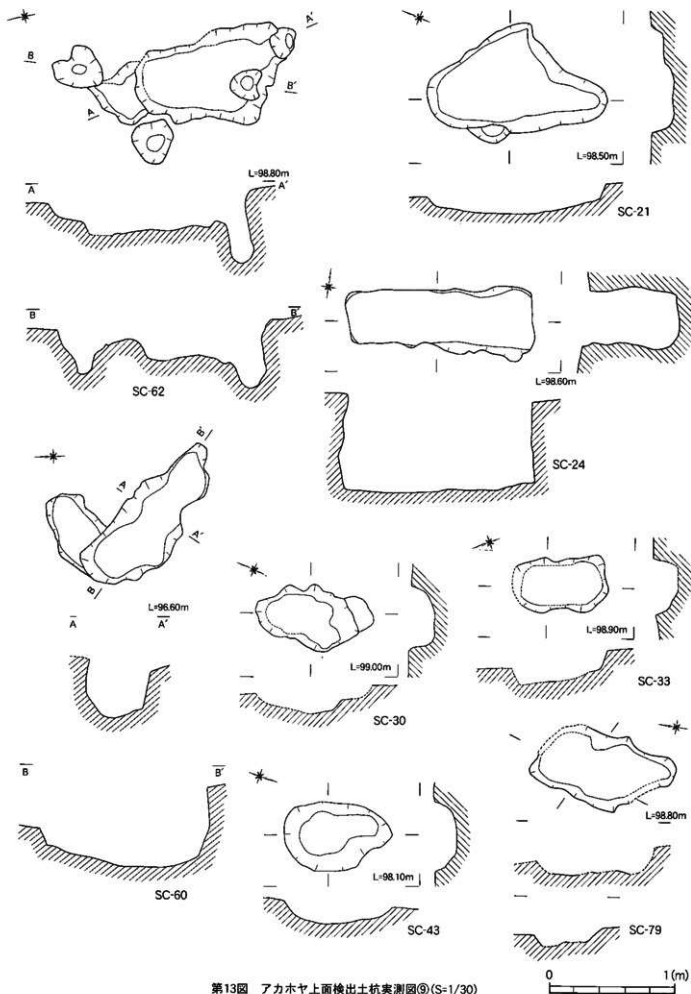
第10図 アカホヤ上面検出土坑実測図⑥(S=1/30)



第11図 アカホヤ上面検出土坑実測図⑦(S=1/30)



第12図 アカホヤ上面検出土坑実測図⑧(S=1/30)



第13図 アカホヤ上面検出土坑実測図⑨(S-1/30)

第1表 アカホヤ上面検出土坑観察表

遺構No	土坑				ビット			備考
	数	プラン			数	プラン		
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		直径(m)	深さ(m)	
SC-1	1	1.1	0.55	0.2	2	0.4	0.6	
						0.3	-	
SC-2	1	0.9	0.45	0.2	1	0.35	0.45	
SC-4	1	1.15	0.65	0.2	1	0.4	0.5	
SC-6	1	0.95	0.45	0.15	1	0.2	0.5	
						0.3	-	
SC-9	1	0.8	0.5	0.15	3	0.3	0.65	
						0.25	0.35	
SC-10	1	1.1	0.45	0.2	1	0.35	0.65	
SC-12	1	0.85	0.55	0.1	1	0.45	1.05	
						0.3	0.45	
SC-15	1	1.1	0.6	0.3	2	0.3	0.2	
SC-16	1	0.85	0.6	0.25	1	0.35	0.8	
SC-17	1	0.95	0.5	0.15	1	0.35	0.6	
						0.2	0.5	
SC-19	1	1.1	0.6	0.15	3	0.25	0.55	
						0.35	0.55	
						0.35	0.55	
SC-22	1	0.95	0.4	0.15	2	0.35	0.65	
SC-23	1	1	0.4	0.2	1	0.4	0.75	
SC-25	1	0.75	0.5	0.15	1	0.3	0.55	
SC-26	1	0.85	0.55	0.2	1	0.3	1	
SC-27	1	0.7	0.55	0.15	1	0.5	0.7	
SC-31	1	0.7	0.35	0.1	1	0.35	0.55	
SC-32	1	0.65	0.5	0.1	1	0.3	0.85	
SC-35	1	1.1	0.55	0.2	1	0.3	0.7	
SC-36	1	0.95	0.45	0.1	1	0.25	0.5	
SC-37	1	0.6	0.4	0.1	1	0.3	0.65	
SC-38	1	0.6	0.3	0.1	1	0.35	0.55	
SC-39	1	0.8	0.45	0.15	1	0.3	0.55	
SC-40	1	0.75	0.35	0.35	1	0.4	0.95	
SC-41	1	0.85	0.6	0.05	1	0.35	0.55	
						0.4	0.6	
SC-42	1	0.9	0.5	0.2	2	0.3	0.45	
						0.5	0.8	
SC-46	1	2.2	0.65	0.4	2	0.4	1	
						0.4	0.7	
SC-47	1	1.3	0.5	0.2	2	0.4	0.8	
						0.4	0.65	
SC-48	1	1.35	0.5	0.3	2	0.4	0.7	
SC-49	1	0.85	0.6	0.3	1	0.4	0.7	
						0.3	0.9	
SC-53	1	0.9	0.4	0.15	2	0.25	0.3	
SC-54	1	1	0.5	0.3	1	0.45	0.7	
						0.35	0.75	土坑が2基の可能性有り
SC-55	1	1	0.7	0.15	2	0.3	0.75	
SC-56	1	1.1	0.8	0.25	1	0.35	0.85	
SC-57	1	0.9	0.55	0.3	1	0.6	0.75	
SC-58	1	1.15	0.5	0.15	1	0.3	0.55	
SC-59	1	1	0.4	0.2	1	0.3	0.55	
SC-61	1	1.1	0.3	0.3	1	0.25	0.4	

遺構No	土坑				ピット			備考		
	数	プラン			数	プラン				
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		直径(m)	深さ(m)			
SC-65	1	1.7	0.7	0.55	2	0.2	1.1			
						0.3	0.5			
SC-66	1	1.05	0.4	0.25	2	0.3	0.65			
						0.2	0.65			
SC-67	1	0.75	0.45	0.25	1	0.25	0.35			
SC-78	1	1.15	0.55	0.15	1	0.35	0.75			
SC-3	3	1.05	0.75	0.1	1	0.35	0.55			
		0.7	0.5	0.3						
		0.75	0.35	-						
SC-5	2	1	0.6	0.3	2	0.3	0.75			
		0.75	0.35	0.4		0.2	0.6			
SC-7	2	0.55	0.4	0.15	1	0.4	0.75			
		0.65	0.3	-						
SC-8	2	1.45	0.45	0.6	2	0.4	0.8			
		0.65	0.5	0.55		0.35	0.7			
SC-11	2	0.9	0.5	0.3	2	0.3	0.45			
		0.95	0.5	0.35		0.35	0.5			
SC-13	2	1.35	0.55	0.35	2	0.25	0.55			
		0.9	0.35	0.1		0.3	0.45			
SC-14	3	0.75	0.4	0.15	2	0.6	0.5			
		0.8	0.2	0.2		0.2	0.35			
		0.35	-	0.15						
SC-18	2	0.9	0.35	0.5	2	0.3	0.55			
		0.85	0.45	0.1		0.2	0.55			
SC-20	2	0.95	0.5	0.4	2	0.45	0.75			
		1.05	0.35	0.35		0.2	0.7			
SC-29	2	1.8	0.5	0.2	2	0.35	0.8			
		0.95	0.6	0.35		0.3	0.8			
SC-34	2	0.6	-	-	2	0.45	0.55			
		0.95	0.5	0.2		0.35	0.75			
SC-44	2	0.8	0.65	0.25	2	0.3	0.3	土坑が3基の可能性有り		
		0.6	-	0.1		0.3	0.35			
SC-45	2	0.65	0.5	0.15	1	0.45	0.75			
		-	0.5	0.1						
SC-50	4	1.75	0.6	0.55	4	0.4	0.7			
		-	0.5	0.4		0.4	0.8			
		0.75	0.4	0.25		0.25	0.55			
		1.2	0.45	0.2		0.4	0.6			
SC-51	2	1.1	0.6	0.25	3	0.3	0.35			
		0.4	-	0.2		0.3	0.4			
						0.35	0.6			
SC-52	2	1	0.45	0.2	2	0.4	0.75			
		0.65	0.3	-		0.25	-			
SC-62	2	1.25	0.7	0.3	4	0.25	0.55			
						0.25	0.5			
		-	0.45	0.15		0.35	0.35			
						0.35	-			
SC-21		1.45	0.85	0.2						
SC-24		1.45	0.45	0.75						
SC-30		0.95	0.5	0.2						
SC-33		0.75	0.35	0.2						
SC-60		1.35	0.5	0.45						
SC-43		0.85	0.5	0.15						
SC-79		1.15	0.6	0.15						



図版2 アカホヤ上面検出土坑群 (西から)



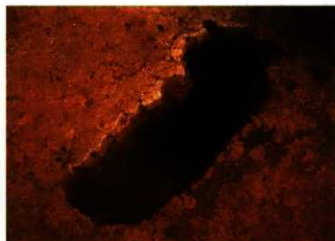
図版3 SC-23① (北から)



図版5
SC-4①
(西から)



図版6
SC-4②
(北西から)



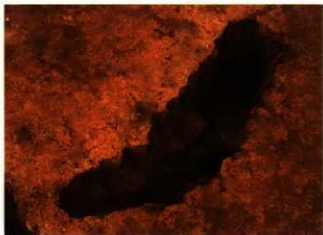
図版4 SC-23② (北西から)



図版7
SC-4③
(北西から)



図版8 SC-1 (北東から)



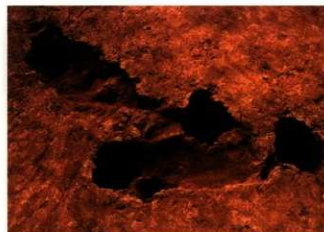
図版9 SC-20 (南西から)



図版10 SC-46 (北西から)



図版11 SC-29 (南西から)



図版12 SC-48 (北から)



図版13 SC-50 (北から)

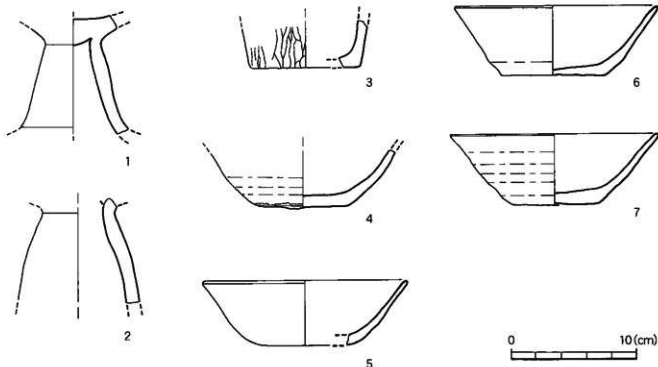
第2節 遺物

1. 土器

アカホヤ火山灰層上位の2層及び3層から、弥生土器と土師器が極わずかではあるが出土した。今回はそのうち7点を資料化している。

1・2については高杯の脚部である。3は土師器の底部であるが、詳細は不明である。4～7は土師器の杯である。4・5は体部がやや曲線的に立ち上がり、底部はヘラ切りの平底である。6・7は体部がほぼ直線的に立ち上がり、底部はヘラ切りの平底である。

遺物 No	種類	器種	残存部位	文様及び調整		色調		法量 (cm)			備考	遺物整理 No	
				外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高			
1	弥生土器	高杯	脚部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にふい橙	10YR3/2黒褐					194	
2	弥生土器	高杯	杯底部～脚部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にふい橙	2.5Y5/3黄褐					192	
3	土師器		底部	ミガキナデ	ナデ	10YR6/3にふい黄橙	2.5Y4/1赤灰					199	
4	土師器	杯	胴部～底部	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にふい橙	10YR5/3にふい黄褐		6.2			底部はヘラ切り	195
5	土師器	杯	口縁～底部	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR5/5明赤褐	13.6	6.5	4.35		底部はヘラ切り	197
6	土師器	杯	口縁～底部	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	7.5YR6/4にふい橙	13.4	6.9	4.6		底部はヘラ切り	196
7	土師器	杯	口縁～底部	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	13.8	5.6	4.8		底部はヘラ切り	198





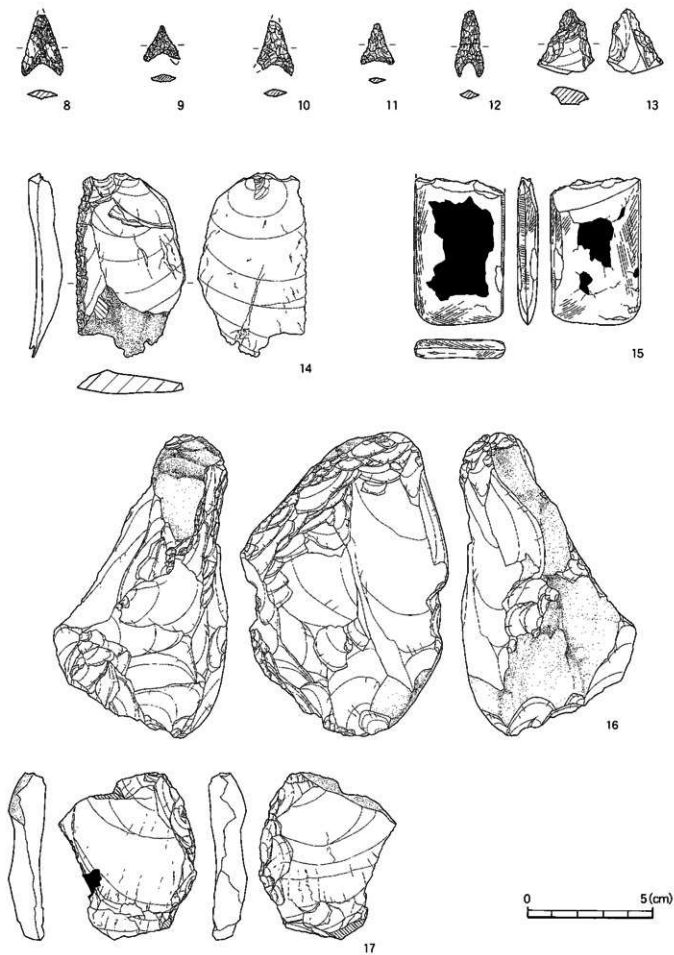
図版14 アカホヤ上位遺物包含層出土石器

2. 石器

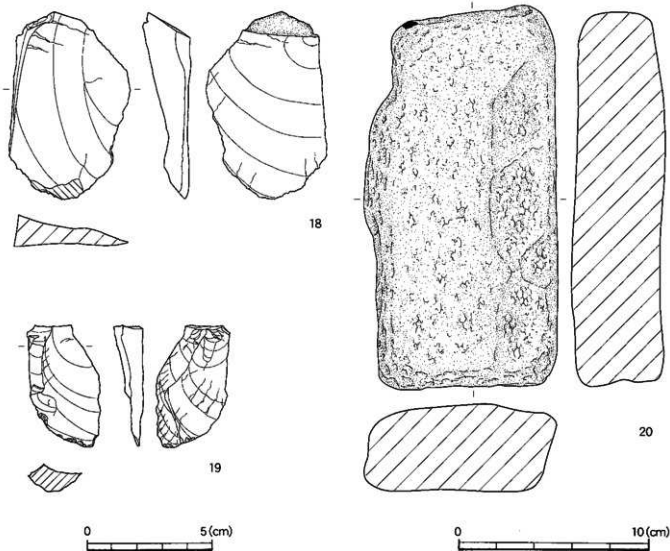
2・3層から石器は石鏃・石鏃未製品・スクレイパー・石斧・石核・剥片・碎片・台石などが出土している。2・3層からは弥生土器や土師器が数点出土しているだけであり、アカホヤ火山灰層上位から出土した石器については時期を明確に特定することが困難である。また製品類は少なく、出土資料の大半は剥片・碎片類となっている。中でも砂岩製の剥片が圧倒的に多く、剥片類の総重量の9割以上を占めている。

8～12は石鏃である。13は素材の周縁に加工を施し、先端部を作り出そうとしている。一応石鏃の未製品に分類したが石錐の可能性も考えられよう。14はスクレイパーで、1点のみ出土している。チャート製の縦長剥片を使用するもので、背面右側縁に腹面側から加撃により刃部加工を施す。15は磨製石斧である。全面磨製のものであるが、剥落が著しく、基部を欠損している。16は砂岩の亜角礫を素材とする石核である。平坦な自然面を打面として打面調整を施さずランダムに剥片を作出する。17～19は剥片である。剥片・碎片は全部で45点出土している。20は砂岩の角礫を素材とした台石である。

前述したが、剥片類では砂岩の角礫や亜角礫の一端に加撃して作出したものと考えられる自然面を残す大振りな剥片が目立つ。総数で29点出土しているが、二次加工を施したものはほとんど確認されていない。また剥片石器の製品類には砂岩製のものがみられない。砂岩製の剥片の使用法の解明は今後の課題である。



第15図 アカホヤ上位遺物包含層出土石器実測図①(S-2/3)

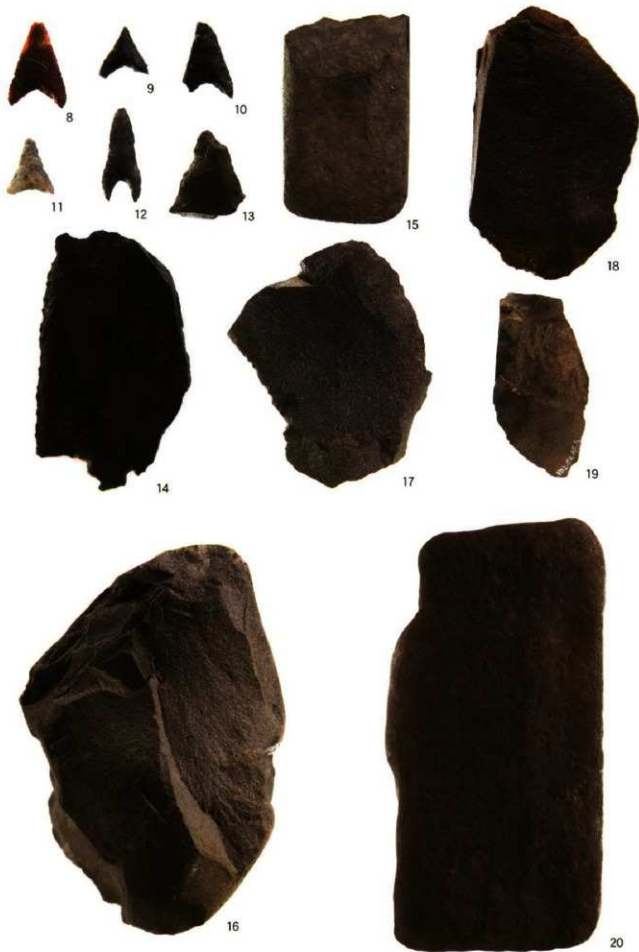


第16図 アカホヤ上位遺物包含層出土石器実測図②(S=2/3・1/2)

第3表 アカホヤ上位遺物包含層出土石器計測分類表

遺物 No	実測 No	出土 グリット	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
8	23	D 2	Ⅲ	石鏃	チャート	(2.35)	1.65	0.35	(1)	先端部欠損
9	25	D 3	Ⅲ	石鏃	黒曜石(針尾)	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.4)	脚部欠損
10	24	D 2	Ⅲ	石鏃	黒曜石(針尾)	(2.2)	(1.45)	0.3	(0.7)	先端部、脚部欠損
11	17	C 2	Ⅲ	石鏃	サヌカイト	1.6	1.3	0.25	0.3	
12	27	D 4	Ⅲ	石鏃	流紋岩	2.6	1.15	0.3	0.7	
13	6	D 3	Ⅲ	石鏃未製品	頁岩	(2.5)	(2.2)	(0.8)	(3.4)	下半部欠損
14	37	D 4	Ⅲ	スクレイパー	チャート	7.2	4.3	1.3	30.8	
15	12	C 3	Ⅲ	磨製石斧	ホルンフェルス	(5.8)	(3.55)	0.8	(29.7)	下半部欠損
16	2	D 4	Ⅲ	石核	砂岩	11.9	8.2	6.9	580.2	
17	3	C 2	Ⅲ	剥片	砂岩	6.6	5.45	1.5	44.8	微細刻痕有
18	35	D 4	Ⅲ	剥片	砂岩	7.3	4.8	1.9	41.5	
19	36	C 2	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	4.75	2.9	1.2	11.5	
20	43	D 2	Ⅲ	台石	砂岩	20.05	10.3	4.9	1773	

() 内の数値は残存値を示す



図版15 アカホヤ上位遺物包含層出土石器

第三章 縄文時代早期についての調査

第1章 遺構

山田第2遺跡では、縄文時代早期の集石遺構が2基、炉穴が5基、陥し穴が2基(その可能性の高い土坑が3基)検出された。

1. 集石遺構

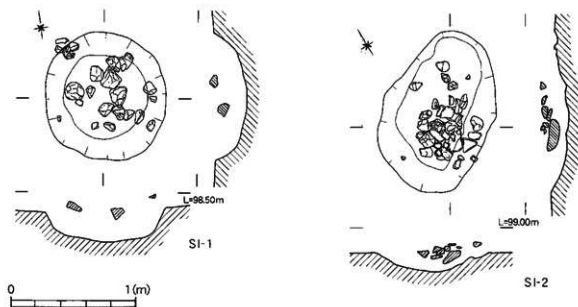
集石遺構については、6層上位から中位にかけて2基検出された。

SI-1

平面プランが円形で断面形状が浅皿状を呈する掘り込みを持ち、掘り込み内の礫密度についてはかなり疎らな状況であった。個々の礫については、赤変した砂岩の角礫が多く、底石は配置されていない。又、埋土は炭化粒を全体に含む黒色土であったが、分析可能な炭化材等は検出されていない。

SI-2

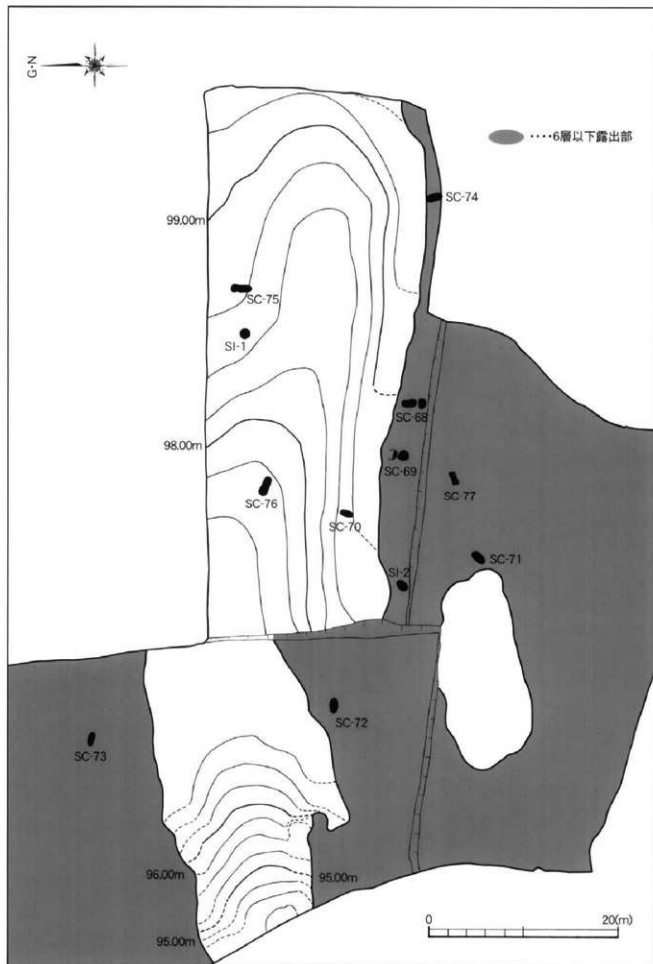
平面プランが楕円形で断面形状がボウル状を呈する掘り込みを持ち、掘り込み内の礫密度については疎らな状況であった。個々の礫については、赤変した砂岩の角礫が多いが、そのなかに他の礫よりも一回り大きな平らな礫が1個確認されている(底石として使用されていた可能性も有り)。又、埋土は炭化粒を全体に含む黒色土であったが、SI-1同様分析可能な炭化材等は検出されていない。



第17図 集石遺構実測図(S=1/30)

第4表 集石遺構観察表

遺構No	礫の密集範囲(m) (長軸) × (短軸)	総礫数 (個)	総礫重量 (kg)	掘り込みのサイズ(m) (直径) × (深さ)	底石の有・無	炭化物の有・無	共存遺物	備考
SI-1	0.8 × 0.6	65	17	1 × 0.3	×	△	×	
SI-2	0.8 × 0.7	27	14.5	1.3・0.8 × 0.3	△	△	×	



第18図 縄文時代早期遺構配置図及びコンタ図(S=1/400)

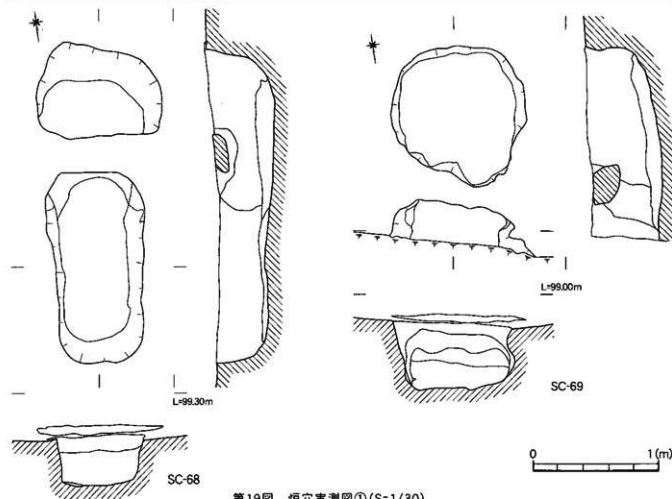
2. 炉穴

SC-68: 検出面は霧島・小林軽石層で、ブリッジが残存する炉穴である。足場については、平面プランは長軸1.5m・短軸0.7mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.6mで、煙出口については長軸1m・短軸0.7mの楕円形を呈している。壁面については、長軸方向は足場・煙道ともにやや緩やかに立ち上がっているが、短軸方向はほぼ垂直に立ち上がっている。又、足場の床面(ブリッジ斜め下)には、足場から煙道を掘り抜いた際の段差を確認することができる。埋土については、かなり硬質な黒褐色土で全体に炭化材及び炭化粒を含んでいた。

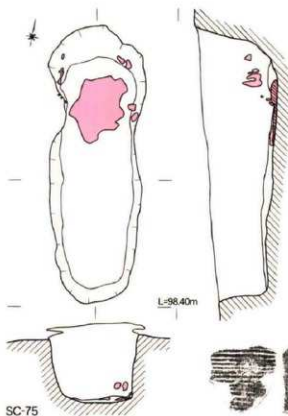
SC-69: 検出面は霧島・小林軽石層で、ブリッジが残存する炉穴であるが、足場の大部分は削平されていた(短軸1m・長軸は不明、深さは0.55m)。煙出口については、直径1.1m・深さ0.55mの円形を呈し、壁面についてはほぼ垂直に立ち上がっている。埋土については、かなり硬質な黒褐色土で、全体に炭化粒を含んでいた。

第5表 炉穴観覧表

遺構 No	サイズ(m)			ブリッジ 残存状況	焼土の位置	炭化物 有・無	年代測定値 (年BP)	共伴 遺物	備考
	(長軸)	(短軸)	(深さ)						
SC-68	2.48	1	0.55	○	-	○	9270±50	×	
SC-69	1.58	1.08	0.58	○	-	×	-	×	
SC-75	2.18	0.8	0.62	×	燃焼部・端部	○	8900±50	○	壇土から貝殻円筒系土器が出土。
SC-74	1.5	0.7	0.4	×	燃焼部・端部	△	-	×	
(SC-76)	2.03	0.9	0.65	×	-	△	-	×	くびれ部があると判断し炉穴として記録した。

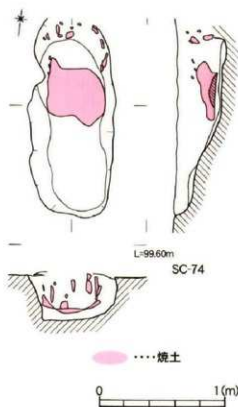


第19図 炉穴実測図①(S=1/30)



SC-75

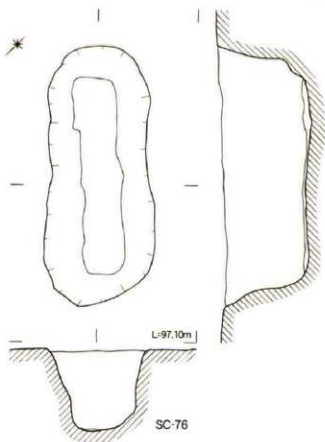
SC-75出土遺物



SC-74



第20図 炉穴実測図②(S=1/30)



SC-76

SC-75: 検出面は霧島・小林軽石層である。平面プランは長軸2.2m・短軸0.7mの長楕円形を呈し、長軸にはブリッジがあったと推測されるくびれ部が確認できる。深さは燃烧部(最深)0.6m・足場(最浅)0.4mで、足場から燃烧部にかけては緩やかに傾斜している。又、壁面についてはほぼ垂直に立ち上がっているが、煙出口の長軸方向のみはやや緩やかに立ち上がっている。埋土については、かなり硬質な黒褐色土で全体に炭化材及び炭化粒を含んでいた。尚、燃烧部付近には焼土が残存し、埋土からは円筒系貝殻土器の胴部が出土している。

SC-74: 検出面は風化した霧島・小林軽石層である。遺構の一部が調査区外にあったため、煙出口付近が完全には調査できない状況であった。平面プランは長軸1.5(推測では1.6mくらいで

は)m・短軸0.7mの長楕円形を呈し、長軸にはブリッジが残存していたと推測されるくびれ部が確認できる。深さは燃烧部(最深)0.4m・足場(最浅)が0.15mで、足場から燃烧部にかけて傾斜している。壁面については、足場の長軸方向はほぼ垂直に立ち上がっているが、短軸方向については、

他の3基(SC-68・69・75)と比較するとやや緩やかに立ち上がっている。埋土については、かなり硬質な黒褐色土で全体に炭化粒を含んでおり、燃焼部付近には焼土が残存していた。

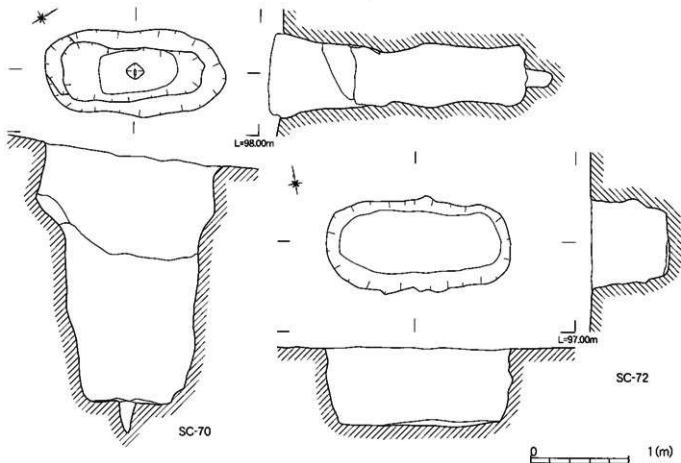
SC-76: 検出面は霧島・小林軽石層である。平面プランは長軸2.2m・短軸0.8mの長楕円形で、長軸中央付近には若干ではあるがくびれ部が確認でき、又、深さは0.7mで平坦である。埋土は、かなり硬質な黒褐色土で全体に炭化粒を含んでおり、遺構の形状や埋土から炉穴の可能性が高いと判断した。

3. 陥し穴

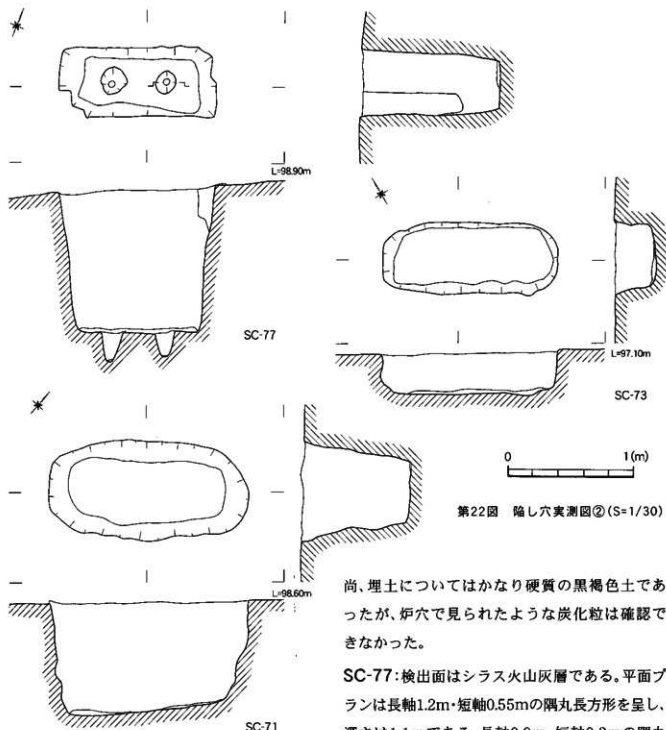
SC-70: 検出面は霧島・小林軽石層である。平面プランは長軸1.45m・短軸0.7mの長楕円形を呈し、深さは2.1mである。硬質な霧島・小林軽石層の下層(基本土層第9層)あたりで、平面・断面ともに一段のすばまりがみられるが、これは捕獲した獲物を逃がさないための工夫であろう。又、平面プランが長軸0.6m・短軸0.35mの楕円形を呈する底部には、直径0.13m・深さ0.25mの逆茂木痕が一ヶ所確認されている。

第6表 陥し穴観察表

遺構No	サイズ (長軸) × (短軸) × (深さ) (m)	逆茂木		検出面	備考
		数 (本)	(直径) × (深さ) (m)		
SC-70	1.42 × 0.7 × 2.05	1	0.15 × 0.25	6層下位	一段のすばまり有り。
SC-77	1.25 × 0.55 × 1.15	2	0.2 × 0.2	5層上面	



第21図 陥し穴実測図①(S=1/30)



第22図 陥し穴実測図② (S=1/30)

尚、埋土についてはかなり硬質の黒褐色土であったが、炉穴で見られたような炭化粒は確認できなかった。

SC-77: 検出面はシラス火山灰層である。平面プランは長軸1.2m・短軸0.55mの隅丸長方形を呈し、深さは1.1mである。長軸0.9m・短軸0.3mの隅丸

方形を呈する底部には、直径0.2m・深さ0.3mの逆茂木痕が2ヶ所確認されている。又、埋土については、SC-70とほぼ同質である。

SC-72-73-71: この3基については、陥し穴として使用された可能性が考えられる土坑である。陥し穴として判断する重要な根拠となる深さについては、検出面が掘り込み面よりもかなり下位であると推測されるため、残存の深さにそれぞれ幾らか足して考察を進めるべきであろう(検出面については以下のとおり)。尚、いずれも逆茂木痕は確認されていない。

SC-72・検出面は霧島・小林軽石層で、推定の深さは1.2m~1.3m。

SC-73・検出面は霧島・小林軽石層~シラス火山灰で、推定の深さは1.2m~1.3m。

SC-71・検出面は霧島・小林軽石層で、推定の深さは1.4m~1.5m。



図版16 SI-1(南から)



図版17 SI-2(北西から)



図版18 SC-68(北から)



図版19 SC-69①(北から)



図版20
SC-69②
(南西から)



図版21
SC-69③
(南から)



図版22 SC-69④(北から)



図版23 SC-74① (北東から)



図版24 SC-74② (北東から)



図版25 SC-74③ (北から)



図版26 SC-75① (南から)



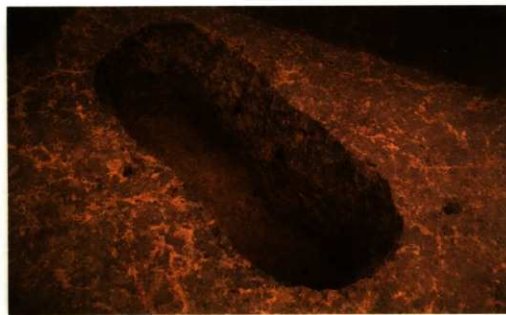
図版27 SC-75② (南から)



図版28 SC-76①(東から)



図版29 SC-76②(南東から)



図版30 SC-76③(南東から)



図版31 SC-70①(南西から)



図版32 SC-70②(西から)



図版34 SC-70④(南西から)



図版33
SC-70③
(西から)



図版35 SC-77①(南東から)



図版36 SC-77②(南東から)



図版37 SC-71 (南西から)



図版38 SC-72 (南東から)



図版39 SC-73 (南東から)

第2節 遺物包含層出土遺物

アカホヤ火山灰層除去後、5層及び6層を掘り下げたところ、縄文時代早期の遺物と礫が出土した。礫は5層上位からバラバラと出土しはじめ、6層上位から中位にかけて最も多量に出土し、6層下位までの総出土数は14,704点であった。今回の調査ではこれらの礫と集石遺構との関連性及び特別な集中区も確認できなかったため、個別の実測作業は行わず出土地点の記録のみを行った(第23図参照)。又、これら多量の礫と前節で紹介した集石遺構の数については、礫の量に対する集石遺構の数が他の遺跡と比較するとあまりに少ないため(わずかに2基検出)、当遺跡付近もしくは既に削平された範囲に相当数の集石遺構が存在していたのではないかと推測される。又、6層下位では縄文時代草創期のもものと推測される爪形文土器が1点出土したが、早期の土器とともに当節で説明することとする(遺物No.134)。

1. 土器

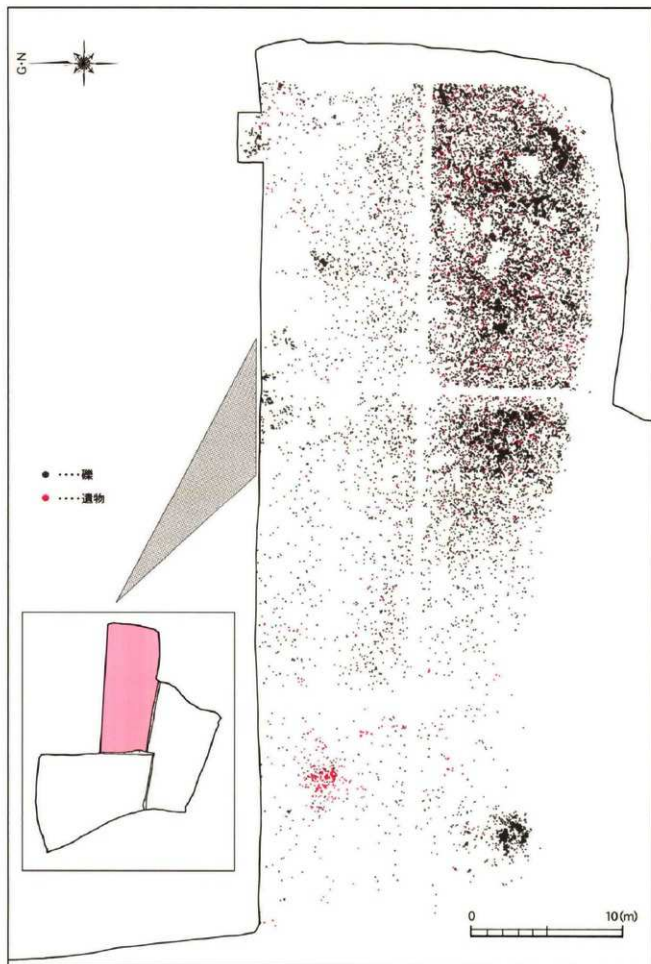
縄文時代早期遺物包含層から出土した土器については、貝殻文系土器・押型文土器・平椀式土器・塞ノ神式土器・貝殻条痕文系土器の5類に大別できる。それぞれの出土数及び分類可能な土器の総数(586点)に占める割合は、貝殻文系土器が379点で約65%、押型文土器が15点で約2.5%、平椀式土器が15点で約2.5%、塞ノ神式土器が158点で約27%、貝殻条痕文土器が19点で約3%となる。この割合をみると、当遺跡における縄文時代早期の土器の出土傾向は、縄文時代早期前葉から中葉にかけての貝殻文系土器が約2/3と大部分を占め、次いで縄文時代早期後葉の塞ノ神式土器が3割弱を占めることとなる。この様に縄文時代早期前葉から中葉にかけての貝殻文系土器が主な出土土器となる近隣遺跡には、白ヶ野第4遺跡(清武町埋蔵文化財調査報告書第13集)と坂元遺跡E区(同15集)があり、これらの遺跡は当台地上に立地する船引遺跡群のなかでも、比較的高い場所に立地する遺跡である点については今後とも注目すべきである。

尚、以上の分類については、担当者の力量不足から不適当な判断も幾つか含まれていると思われるが、あくまでも当遺跡における縄文時代早期の土器についてのアウトラインを把握するための作業であるので、その点を踏まえたうえで考察を進めていく一資料としてこれらのデータを活用したい。

貝殻文系土器

分類可能な貝殻文系土器379点のうち、今回は84点を資料化している。

1はほぼ直立する深鉢の口縁部から胴部上位で、口縁部外面には横位の貝殻条痕文を施し、その施文部下位から丸くおさめた口唇部にかけてはやや内湾している。2・3は外面に横位・斜位の貝殻条痕文を施した口縁部で、口唇部はやや丸くおさめている。4～10は外面に横位・



第23図 縄文時代早期遺物包含層出土遺物及び出土穴分布図(S-1/250)

斜位の貝殻条痕文を施した後、縦位のキザミ目を施した口縁部で、口唇部については平坦面を作りだしているものがほとんどである(9・10がやや丸くおさめている)。11から29は外面に横位・斜位の貝殻条痕文を施した後、横位の貝殻押印文を施した口縁部で、14・19・22はやや外反している。尚、口唇部については、平坦面を作りだしているもの(11～15・17～21・26・29)と丸くおさめているもの(16・22～25・27・28)がある。30～41は外面に横位・斜位の貝殻条痕文を施した後、貝殻刺突文を施した口縁部で、34・40はやや外反している。尚、口唇部については、平坦面を作りだしているもの(33～37・40・41)と丸くおさめているもの(30～32・38・39)がある。42～48は外面に横位・斜位の貝殻条痕文を施した胴部であるが、器形は全て円筒形である。49・50は外面に貝殻条痕文を施した底部であるが、小破片のため詳細は不明である。51・52は外面に横位の貝殻条痕文を施した後、口唇部直下に横位の貝殻刺突文を施し、加えてその貝殻刺突文の下にクサビ形突帯を貼り付けた口縁部である。又、いずれも口唇部には平坦面を作り出しており、その平坦面にキザミ目を施している。53～56は外面に横位の貝殻条痕文を施した後、縦位の貝殻刺突文を施し、加えてクサビ形突帯を貼り付けた胴部で、51・52と同形式の土器である。57～63は角筒形の土器で、57が口縁部、58～63は胴部である。57は口唇部をやや尖り気味におさめ、外面には斜位の貝殻条痕文を施した後、縦位の貝殻刺突文を施し、加えて口唇部直下に斜横位の貝殻刺突文を施している。58～63も横位・斜位の貝殻条痕文を施した後、縦位の貝殻刺突文を施しているが、角筒形の角(角)になっている部分を意識しての施文が確認できる。64～74は57～63とほぼ同じ施文的特徴を持っている円筒形の土器で、64・66は口縁部、65・67～74は胴部である。64・66の口唇部については、64はやや丸くおさめていて、66は内部にむけてやや傾いた平坦面を作り出している。尚、64の口唇部にはキザミ目を施している。75～77は外面に羽状の貝殻刺突文を施した土器(75口縁部・76胴部・77底部)で、75の口唇部については内部にむけてやや傾いた平坦面を作り出している。77は外面に貝殻刺突文を施した底部で平底である。79は口縁部直下外面に横位の貝殻刺突文を施し、加えてハの字状の短沈線文を施した口縁部で、口唇部には平坦面を作り出している。80も79とほぼ同じ特徴を有する口縁部であるが、口唇部直下の施文が貝殻刺突文ではなくキザミ目を施している。81～84は79と同形式の胴部で、81・82には貝殻刺突文と短沈線文を、83・84には短沈線文を施している。

押型文土器

分類可能な押型文土器15点のうち、今回は11点を資料化している。

85は外面に斜位の楕円押型文を施した口縁部で、口唇部については平坦面を作り出し、不明瞭ではあるがそこに楕円押型文を施している。又、86～88は外面に楕円押型文を施した胴部であるが、小破片のため詳細は不明である。89は内面に横位・外面に縦位の山形押型文を施した口縁部で、やや外反した口唇部に作り出された平坦面に山形押型文を施している。又、90～92は外面に横位・縦位の山形押型文を施した胴部であるが、86～88同様小破片のため詳

細は不明である。93～95は外面に縦位の山形押型文及び菱形文を施した胴部(93・94は屈曲部)であるが、その施文や器形からみて手向山式土器であると推測される。

平栴式土器

分類可能な平栴式土器15点のうち、今回は5点を資料化している。

96は口縁部に断面三角形の突帯を巡らし、それにハの字の短沈線文を施した口縁部である。口唇部についてはやや尖り気味におさめそこにキザミ目を施している。97・98は突帯にキザミ目を施した胴部で、99・100は縄文を施した胴部であるが、小破片のため詳細は不明である。

塞ノ神式土器

分類可能な塞ノ神式土器158点のうち、今回は27点を資料化している。

101～105は外面に数条から十数条の微隆帯を巡らし、それに細かなキザミ目を施した壺の頸部で、106は内・外面ともにナデ調整を施した壺の口縁部である。107～109は外面に微隆帯を巡らしそれにキザミ目を施し、加えて細い棒状工具による沈線文や連点文を施した口縁部で、口唇部についてはいずれも尖り気味におさめ、キザミ目を施している(110は同形式の胴部)。111～115は外面に棒状工具による沈線文と燃糸文を施した土器で、111はラッパ状に広がる口縁部、その他は胴部である。116～122は外面に棒状工具による沈線文を施し、その沈線文間に縄文を施した土器で、116はラッパ状に広がる口縁部、その他は胴部である。尚、116の口唇部については、やや尖り気味におさめキザミ目を施している。125～127は外面に沈線文が施された壺の口縁部で、口唇部については124・127がやや丸くおさめ、125は平坦面を作り出している。この4点はその施文からみて線刻土器の可能性も考えられる。

貝殻条痕文土器

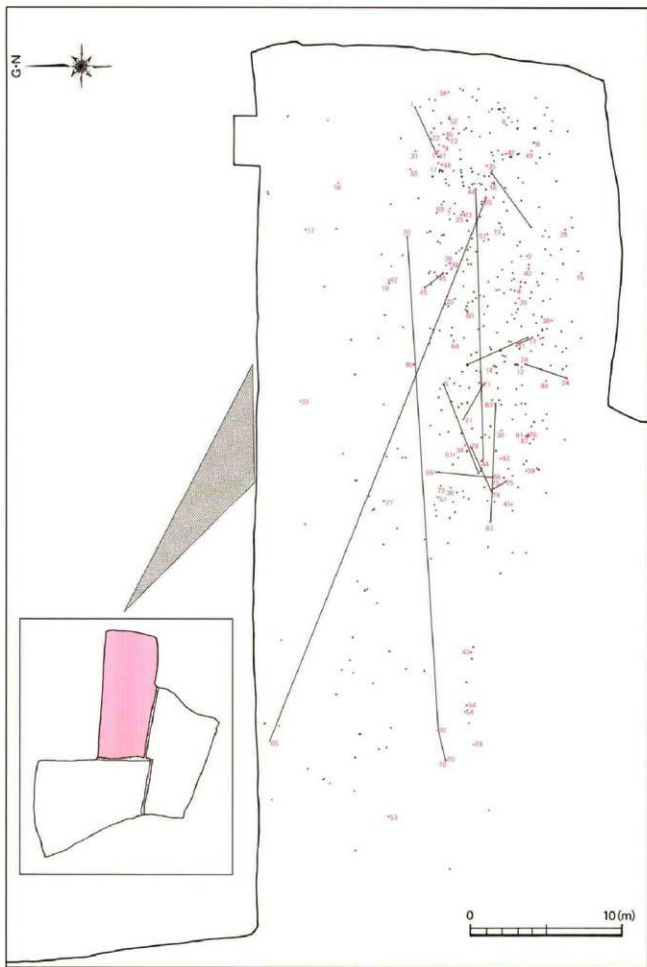
分類可能な貝殻条痕文土器19点のうち、今回は6点を資料化している。

128は外面に横位・縦位の貝殻条痕文を施した口縁部で、口唇部にはやや内部に傾いた平坦面を作り出している。129・130については128と同形式の胴部であるが、小破片のため詳細は不明である。131～133は外面に横位・縦位の貝殻条痕文を施す胴部であり、131についてはやや砲弾形の器形を呈すると推測される。尚、132・133については小破片のため詳細は不明である。

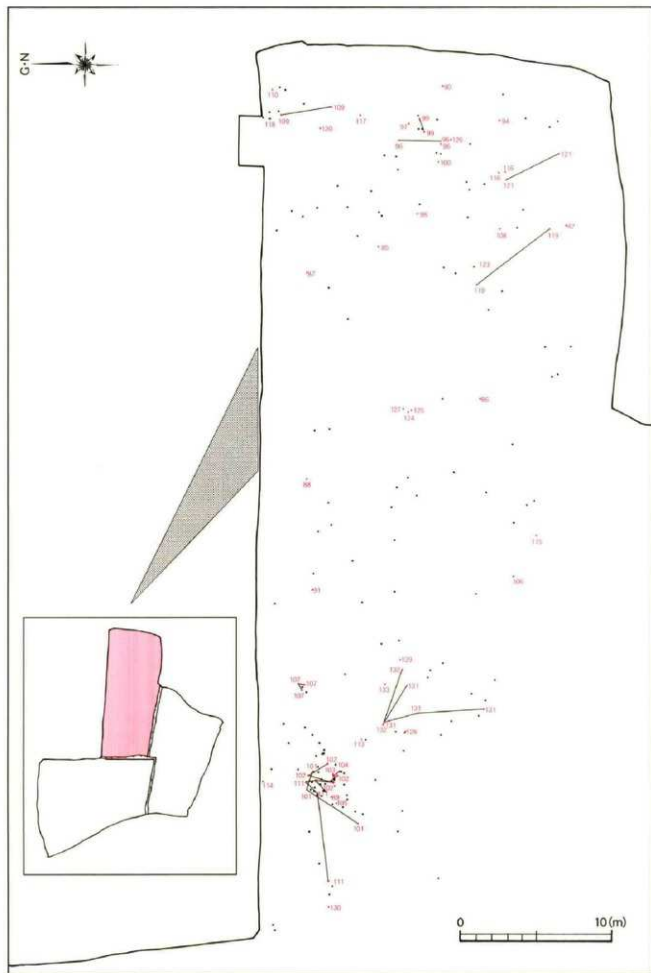
縄文時代草創期の土器

先述のとおり6層下位から出土した134は、縄文時代草創期の土器である。

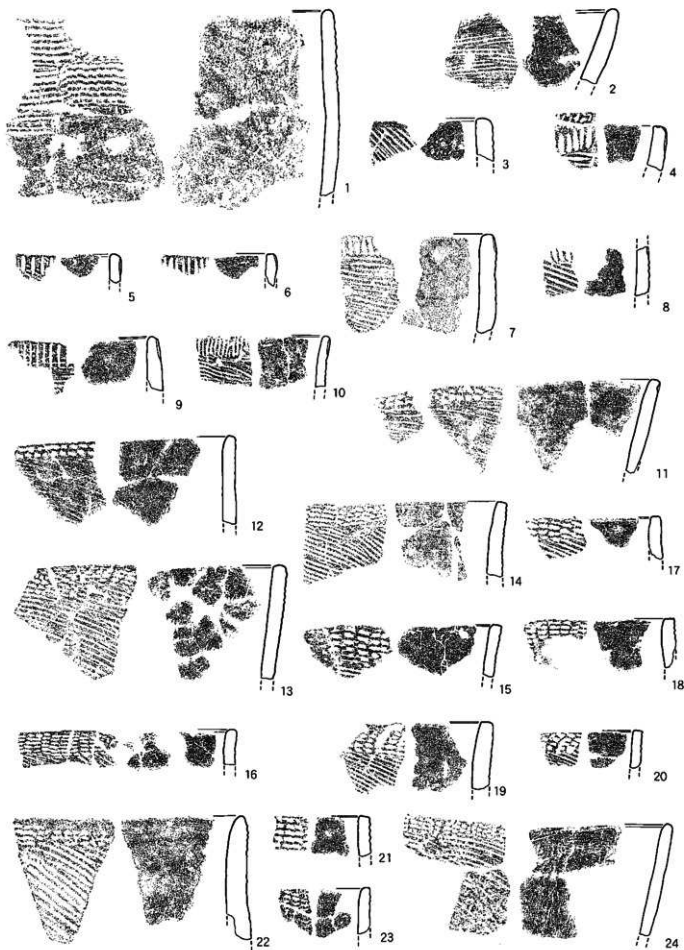
外面に隆帯文を巡らしその隆帯間に爪形文を施した口縁部で、口唇部についてはやや丸めにおさめている。尚、内面についてはナデ調整が施されている。



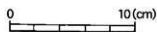
第24圖 縄文時代早期遺物包含層出土土器分布図①(S=1/250)

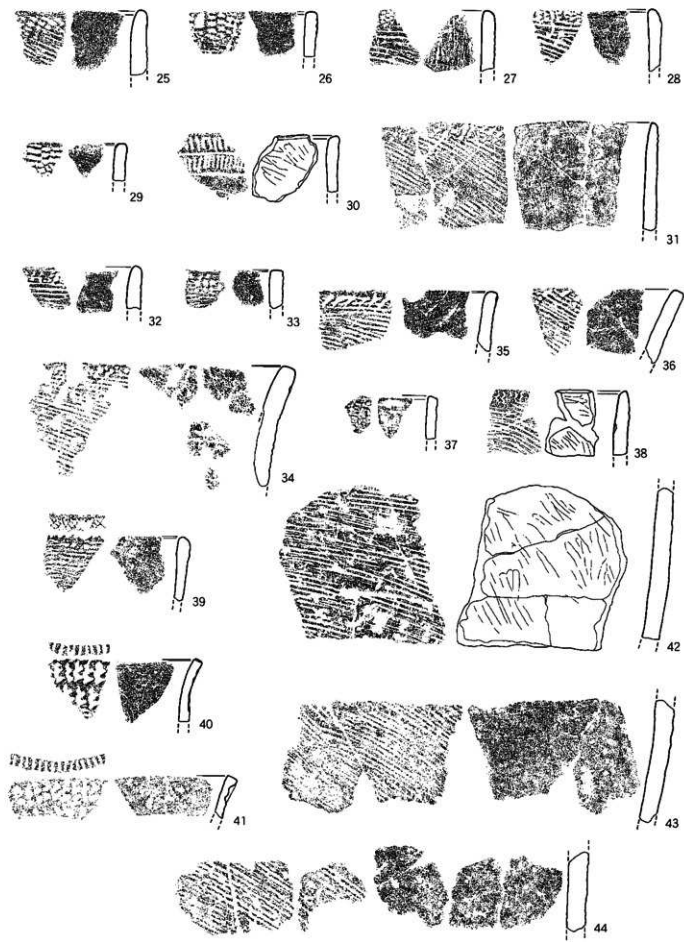


第25図 縄文時代早期遺物包含層出土土器分布図②(S=1/250)

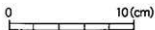


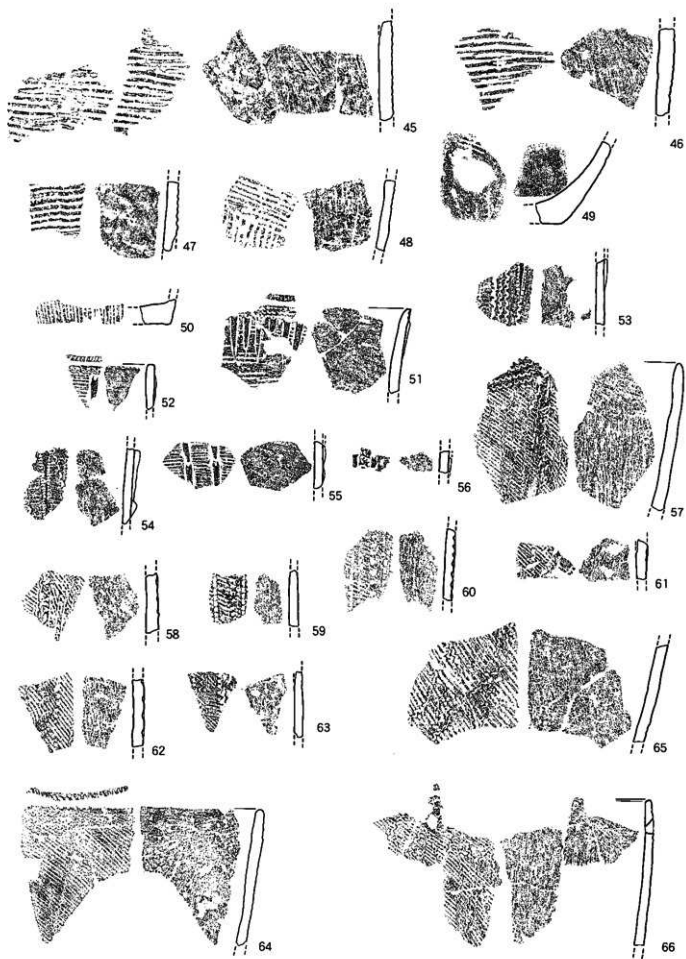
第26図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図①(S=1/3)





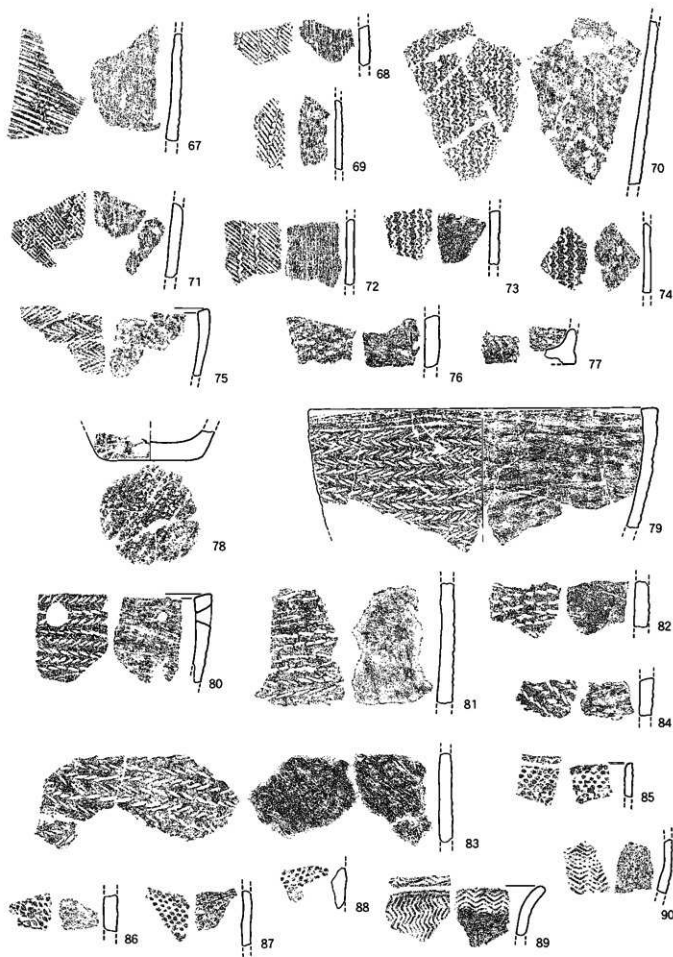
第27図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図②(S-1/3)





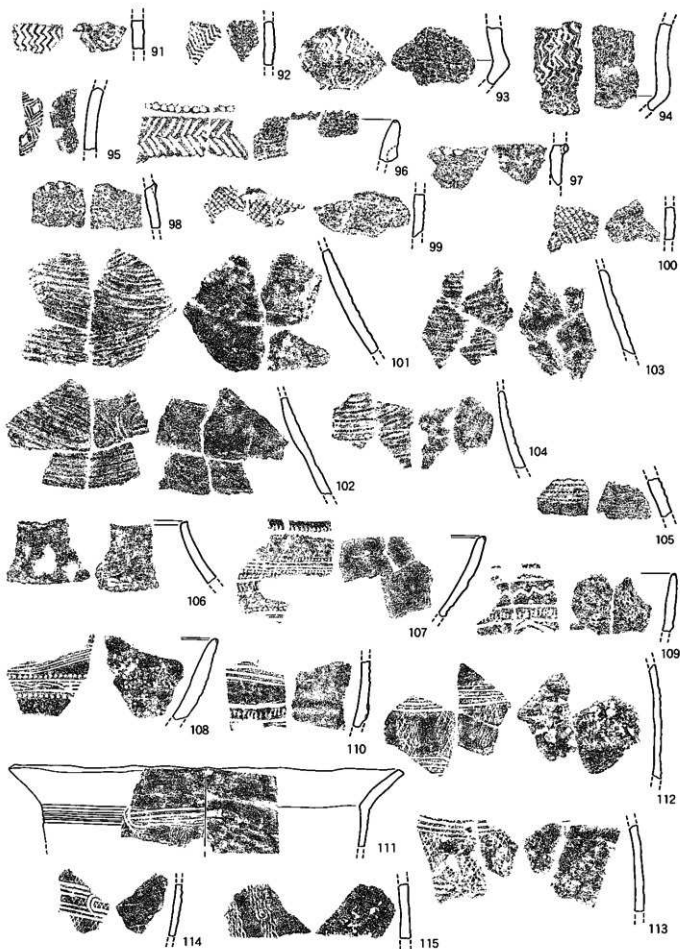
第28図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図③(S=1/3)





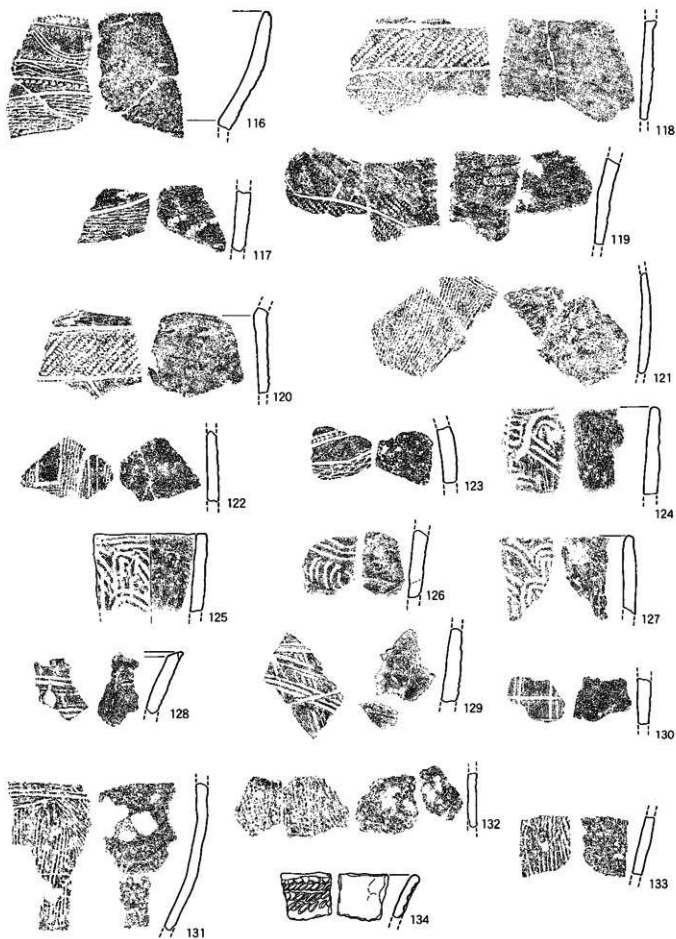
第29図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図④(S=1/3)





第30図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図⑤(S=1/3)





第31図 縄文時代早期遺物包含層出土土器実測図⑥(S=1/3)



第7表 縄文時代早期遺物包含層出土土器観察表

遺物No	分類	出土層位	器形	部位	文様及び調整		色調		胎土					備考	遺物整理No	
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	粘土	角閃石	砂粒			
1	Ia	VI層	深鉢	口縁~胴部	貝殻条痕文	ナデ	2.5Y5/3 黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	○	○			○	2mm~5mm		95
2	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下		92
3	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	○	○			○	2mm以下	口唇部はミガキ	119
4	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	10YR7/1 灰	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	1mm以下	口唇部にキザミ	78
5	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	○	○			○	1mm以下		71
6	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ	ナデ	7.5YR5/2 褐灰	2.5Y4/2 暗灰黄	○	○			○	1mm以下		124
7	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下		50
8	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下		82
9	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下		88
10	Ia	VI層	深鉢	口縁	キザミ 貝殻条痕文	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	○	○			○	1mm以下		84
11	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5YR6/3 にぶい橙	○	○			○	1mm以下		111
12	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	○	○			○	1mm以下		90
13	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	○	○			○	1mm以下		91
14	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○			○	2mm以下		51
15	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○			○	4mm以下		77
16	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR4/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下	口唇部はミガキ	76
17	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR4/3 褐	5YR5/3 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下		81
18	Ia	VI層	深鉢	口縁	(貝殻条痕文) 貝殻押引文	ミガキ	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下		106
19	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	1mm以下		86
20	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR5/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄橙	○	○			○	1mm以下		80
21	Ia	V層	深鉢	口縁	貝殻押引文	ナデ	7.5YR4/1 褐灰	5YR5/3 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下		83
22	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	3mm以下		49
23	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻押引文 (ナデ)	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○			○	1mm以下		72
24	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR3/4 暗褐	○	○			○	1mm以下	口唇部はミガキ	89
25	Ia	V層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	○	○			○	2mm以下		79
26	Ia	VI層	深鉢	口縁	(貝殻条痕文) 貝殻押引文	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○			○	1mm以下		93
27	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5Y7/1 灰白	○	○			○	1mm以下		75
28	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻押引文	ナデ	7.5YR4/3 褐	2.5Y3/2 黒褐	○	○			○	1mm以下		85
29	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻押引文	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○			○	3mm以下		94
30	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻押引文 土層文	ミガキ	10YR5/3 にぶい黄橙	2.5Y4/1 赤灰	○	○			○	1mm以下		166
31	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	○	○			○	2mm以下		52
32	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR7/1 灰白	7.5YR7/2 明褐灰	○	○			○	1mm以下		74
33	Ia	V層	深鉢	口縁	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	○	○			○	1mm以下		73

遺物No	分類	出土層位	器形	部位	文様及び調整		色調		胎土					備考	遺物整理No	
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	珪石	角閃石	砂粒			
34	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○	○	○	○	1mm以下		104
35	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄褐	○	○	○	○	○	1mm以下		108
36	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	10YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○			○	2mm以下	外面にスス付着	101
37	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	10YR6/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			○	1mm以下		100
38	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐		○			○	2mm以下		190
39	Ia	V層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○			○	1mm以下	口唇部にかけて刺突文を施す	105
40	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下	口唇部にキザミ	87
41	Ia	VI層	深鉢	口縁	貝殻刺突文	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○			○	1mm以下	口唇部にキザミ	57
42	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ミガキ	10YR6/4 にぶい黄褐	N-3 暗灰	○	○			○	2mm以下		191
43	Ia	V層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ナデ	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	○	○			○	3mm以下		109
44	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	2mm以下		98
45	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ケズリ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	○	○			○	1mm以下		99
46	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ケズリ	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下	外面にスス付着	107
47	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄褐	○	○			○	2mm以下		96
48	Ia	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	○	○			○	1mm以下		103
49	Ia	VI層	深鉢	底部	貝殻赤灰文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	3mm以下		162
50	Ia	VI層	深鉢	底部	貝殻赤灰文	ナデ	7.5YR4/4 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下		102
51	Ib	VI層	深鉢	口縁部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文 クサビ形貼付	ナデ	5YR4/3 にぶい赤褐	2.5YR4/4 にぶい赤褐	○	○			○	2mm以下	口唇部にキザミ	44
52	Ib	VI層	深鉢	口縁部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文 クサビ形貼付	ナデ	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/4 褐	○	○			○	1mm以下	口唇部にキザミ	136
53	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文 クサビ形貼付	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	○	○			○	2mm以下		153
54	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文 クサビ形貼付	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	3mm以下		156
55	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 クサビ形貼付	ナデ	5YR4/2 灰褐	7.5YR7/2 明赤灰	○	○			○	1mm以下		140
56	Ib	V層	深鉢	胴部	クサビ形貼付	ナデ	5YR5/2 灰褐	2.5YR7/2 明赤灰	○	○			○	1mm以下		141
57	Ib	VI層	深鉢	口縁部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	○	○			○	2mm以下	口唇部にキザミ 角筒形	48
58	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	○	○			○	2mm以下	角筒形	138
59	Ib	V層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下	角筒形	150
60	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	○	○			○	1mm以下	角筒形	47
61	Ib	V層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR3/1 黒褐	○	○			○	2mm以下	角筒形	148
62	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/3 にぶい赤褐	○	○			○	1mm以下	角筒形	144
63	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	10YR4/1 褐灰	5YR3/1 黒褐	○	○			○	1mm以下	角筒形	159
64	Ib	VI層	深鉢	口縁部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	○	○			○	2mm以下	口唇部にキザミ	45
65	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR7/2 明赤灰	○	○			○	3mm以下		147
66	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻赤灰文 貝殻刺突文	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR7/2 明赤灰	○	○			○	2mm以下	穿孔あり・口唇部に 連続キザミ	145

遺物No	分類	出土層位	器形	部位	文様及び調整		色調		胎土					備考	遺物整理No
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	矽酸	角閃石	砂粒		
67	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にふい黄褐	7.5YR5/4 にふい褐	○	○	○	○	○	2mm以下	151
68	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	2.5YR4/4 にふい赤褐	○	○		○	○	1mm以下	143
69	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にふい赤褐	○	○	○		○	2mm以下	164
70	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にふい黄褐	2.5YR4/2 暗灰黄色	○	○			○	2mm以下	146
71	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	10YR6/4 にふい黄橙	7.5YR7/2 明褐灰色	○	○		○	○	2mm以下	139
72	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ケズリ	7.5YR5/3 にふい褐	7.5YR4/3 褐	○	○		○	○	2mm以下	149
73	Ib	VI層	深鉢	胴部	貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3 にふい黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	○	○	○		○	2mm以下	137
74	Ib	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文 貝殻刺突文	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	10YR5/2 灰黄褐	○	○			○	1mm以下	152
75	IC	VI層	深鉢	口縁部	貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	○	○			○	1mm以下	132
76	IC	VI層	深鉢	胴部	貝殻刺突文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	5YR4/3 にふい赤褐	○	○			○	1mm以下	120
77	IC	VI層	深鉢	胴部～ 底部	貝殻刺突文 ミガキ	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR4/3 褐	○	○	○		○	1mm以下	115
78	IC	VI層	深鉢	底部	貝殻刺突文 ナデ	ナデ	2.5Y5/4 黄褐	7.5YR5/4 にふい褐	○	○			○	2mm以下	底部径8.0cm 189
79	IC	VI層	深鉢	口縁部	貝殻刺突文 短沈線文	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	○	○			○	2mm以下	口縁径27.2cm 53
80	IC	VI層	深鉢	口縁部	貝殻刺突文 短沈線文	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR5/4 にふい褐	○	○		○	○	1mm以下	穿孔あり 117
81	IC	V層	深鉢	胴部	貝殻刺突文 短沈線文	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○		○	○	2mm以下	54
82	IC	VI層	深鉢	胴部	貝殻刺突文 短沈線文	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○		○	○	1mm以下	121
83	IC	VI層	深鉢	胴部	短沈線文	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○		○	○	1mm以下	122
84	IC	VI層	深鉢	胴部	短沈線文	ケズリ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	○	○			○	1mm以下	116
85	II	VI層	深鉢	口縁部	楕円押型文	楕円押型文	5YR5/4 にふい赤褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○			○	1mm以下	114
86	II	V層	深鉢	胴部	楕円押型文	ナデ	5YR5/4 にふい赤褐	2.5YR4/2 灰赤	○	○		○	○	2mm以下	126
87	II	VI層	深鉢	胴部	楕円押型文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	7.5YR7/1 明褐灰	○	○			○	1mm以下	128
88	II	V層	深鉢	胴部	楕円押型文	-	10YR5/3 にふい黄褐	-	○	○		○	○	1mm以下	134
89	II	VI層	深鉢	口縁部	山形押型文	山形押型文 ナデ	10YR5/3 にふい黄褐	10YR5/3 にふい黄褐	○	○		○	○	3mm以下	55
90	II	V層	深鉢	胴部	山形押型文	ナデ	7.5YR5/4 にふい褐	10YR5/3 にふい黄褐	○	○		○	○	1mm以下	6mm以下の轆を含む 130
91	II	VI層	深鉢	胴部	山形押型文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/1 明褐灰	○	○		○	○	1mm以下	123
92	II	V層	深鉢	胴部	山形押型文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にふい黄褐	○	○		○	○	1mm以下	3mm以下の轆を含む 113
93	II	V層	深鉢	胴部 (屈曲部)	山形押型文	ナデ	7.5YR5/4 にふい褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○			○	2mm以下	129
94	II	VI層	深鉢	胴部 (屈曲部)	山形押型文	ナデ	7.5YR5/4 にふい褐	5YR7/2 明褐	○	○		○	○	2mm以下	135
95	II	-	深鉢	胴部	菱形押型文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○			○	1mm以下	131
96	III	VI層	深鉢	口縁部	短沈線文	ナデ	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/3 にふい褐	○	○		○	○	2mm以下	口唇部にキザミ 127
97	III	VI層	深鉢	胴部	刻目突帯文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	5YR6/1 褐灰	○	○			○	1mm以下	125
98	III	VI層	深鉢	胴部	刻目突帯文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	5YR5/4 にふい赤褐	○	○		○	○	1mm以下	118
99	III	V層	深鉢	胴部	縄文	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	○	○			○	1mm以下	133
100	III	VI層	深鉢	胴部	縄文	ナデ	7.5YR5/3 にふい褐	2.5YR7/2 明赤灰	○	○			○	1mm以下	112

遺物No	分類	出土層位	器形	部位	文様及び調整		色調		胎土					備考	遺物整理No	
					外面	内面	外面	内面	石英	長石	矽泥	加砂	角閃石			砂粒
101	IV	VI層	壺	胴部(頸部)	滑隆帯(キザミ)	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	○	○			○	2mm以下		171
102	IV	V層	壺	胴部(頸部)	滑隆帯(キザミ)	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○		○	2mm以下		170	
103	IV	VI層	壺	胴部(頸部)	滑隆帯(キザミ)	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○		○	2mm以下		172	
104	IV	V層	壺	胴部(頸部)	滑隆帯(キザミ)	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	○	○		○	4mm以下		183	
105	IV	V層	壺	胴部(頸部)	滑隆帯(キザミ)	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/2灰褐色	○	○		○	2mm以下		182	
106	IV	V層	壺	口縁部	ナデ	ナデ	7.5YR5/3にぶい場	2.5YR7/2明赤灰	○	○		○	2mm以下		110	
107	IV	VI層	深鉢	口縁部	連点文・刺突文・沈線文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○	○		3mm以下	口唇部にキザミ	185	
108	IV	VI層	深鉢	口縁部	連点文・刺突文・沈線文	ナデ	7.5YR5/3にぶい場	7.5YR5/3にぶい場	○	○			2mm以下	口唇部にキザミ	161	
109	IV	VI層	深鉢	口縁部	刺突文・沈線文	ナデ	7.5YR5/4にぶい場	7.5YR5/4にぶい場	○	○			1mm以下	口唇部にキザミ	154	
110	IV	V層	深鉢	胴部	刺突文・沈線文	ナデ	7.5YR5/4にぶい場	5YR5/4にぶい赤褐色	○	○			2mm以下		158	
111	IV	VI層	深鉢	口縁部～胴部	沈線文・刺突文	ナデ	7.5YR5/3にぶい場	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○		○	2mm以下	口縁径30cm	168	
112	IV	VI層	深鉢	胴部	沈線文・刺突文	ナデ	10YR6/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○			2mm以下		176	
113	IV	V層	深鉢	胴部	沈線文・刺突文	ナデ	7.5YR5/4にぶい場	7.5YR5/2灰褐色	○	○		○	2mm以下		173	
114	IV	V層	深鉢	胴部	沈線文・刺突文	ナデ	7.5YR4/1褐色	7.5YR4/2灰褐色	○	○			2mm以下		180	
115	IV	V層	深鉢	胴部	刺突文	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○	○			2mm以下		184	
116	IV	VI層	深鉢	口縁部	連点文・刺突文・沈線文・縄文	ナデ	7.5YR5/3にぶい場	7.5YR5/3にぶい場	○	○	○		2mm以下	口唇部にキザミ	174	
117	IV	V層	深鉢	胴部	沈線文・縄文	ナデ	7.5YR6/4にぶい場	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○			2mm以下		181	
118	IV	V層	深鉢	胴部	沈線文・縄文	ナデ	7.5YR5/4にぶい場	7.5YR5/4にぶい場					2mm以下		58	
119	IV	VI層	深鉢	胴部	沈線文・縄文	ナデ	7.5YR6/4にぶい場	7.5YR5/3にぶい場	○	○			2mm以下		178	
120	IV	V層	深鉢	胴部	沈線文・縄文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	5YR5/4にぶい赤褐色	○	○		○	2mm以下		177	
121	IV	VI層	深鉢	胴部	縄文	ナデ	7.5YR6/4にぶい場	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○			2mm以下		175	
122	IV	V層	深鉢	胴部	縄文・刺突文・沈線文	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	10YR4/2灰黄褐色	○	○		○	1mm以下		169	
123	IV	VI層	深鉢	胴部	沈線文・刺突文・貝殻刺突文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	○	○		○	2mm以下		179	
124	IV	VI層	(壺)	口縁部	沈線文	ナデ	7.5YR6/4にぶい場	7.5YR7/2明褐色	○	○			2mm以下		160	
125	IV	VI層	(壺)	口縁部	沈線文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		○	1mm以下		165	
126	IV	VI層	深鉢	口縁部	沈線文	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR7/1灰白	○				1mm以下		163	
127	IV	V層	深鉢	口縁部	沈線文	ナデ	10YR6/4にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄褐色	○				2mm以下		56	
128	V	V層	深鉢	口縁部	貝殻条痕文	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	2.5Y5/2暗灰黄	○	○			2mm以下	口唇部にキザミ	187	
129	V	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	10YR4/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	○	○			2mm以下		186	
130	V	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	10YR5/2灰黄褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○			1mm以下		167	
131	V	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	7.5YR5/3にぶい場	○	○		○	2mm以下		188	
132	V	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	5YR5/4にぶい赤褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	○	○		○	1mm以下		157	
133	V	V層	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR5/4にぶい場	○	○			1mm以下		155	
134	★	VI層	深鉢	口縁部	爪形文	ナデ	7.5YR5/3にぶい場	2.5Y5/2暗灰黄	○	○			1mm以下	革創期	193	

2. 石器

縄文時代早期の遺物包含層からは総数208点の石器が出土した。

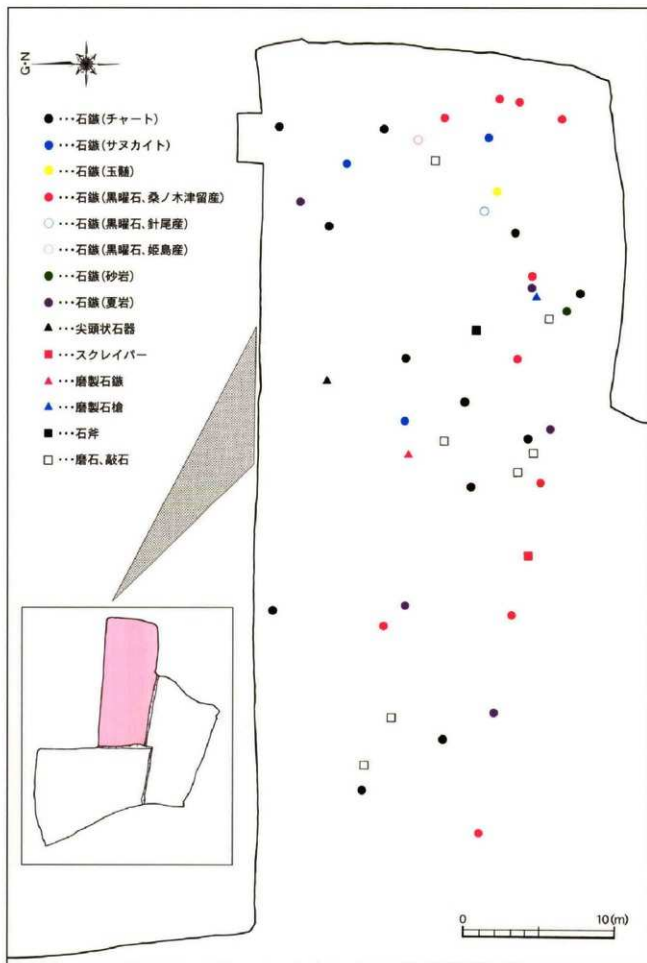
打製石鏃は未製品・欠損品を含め35点が出土した。そのうち28点(135~162)を図示している。使用石材はチャート・桑ノ木津留産黒曜石・頁岩が大半を占める。桑ノ木津留産黒曜石製のもの(145~151)は長さ2cm未満の小形品ばかりである。また縄文早期の調査範囲の中では出土位置が南東部に偏る傾向が見られた。又、鉞形鏃(138)や帖地型石鏃(142・150)に分類される資料も見られる。144は平面形が帖地型石鏃に類似するが、抉りが深い点で特徴が異なるものである。157は風化の為か使用または研磨の痕跡か不明であるが表面に部分的に光沢が認められる。142・143・156・157・159は素材剥片の形状を残すものである。160~162は素材剥片の形状を大きく残し、加工が体部中央まで及んでいないことから石鏃の未製品に分類した。しかし、160・161に関しては一応抉り部も先端部も作り出されているので完成品の可能性も考えられる。

163は頁岩製の局部磨製石鏃である。研磨は両面ともに体部中央部のみ施されており、先端部・脚部を欠損している。164は粘板岩製の磨製石器である。研磨痕は全面にしっかりと確認される。下半部を欠損している為全体の形状は不明であり、器種分類が行えない。研磨により尖頭部を作り出しているのが狩猟具の類と考えられるだろうか。今回の報告では磨製石鏃としては細身で少し分厚いことから一応磨製石槍の破片として報告を行う。

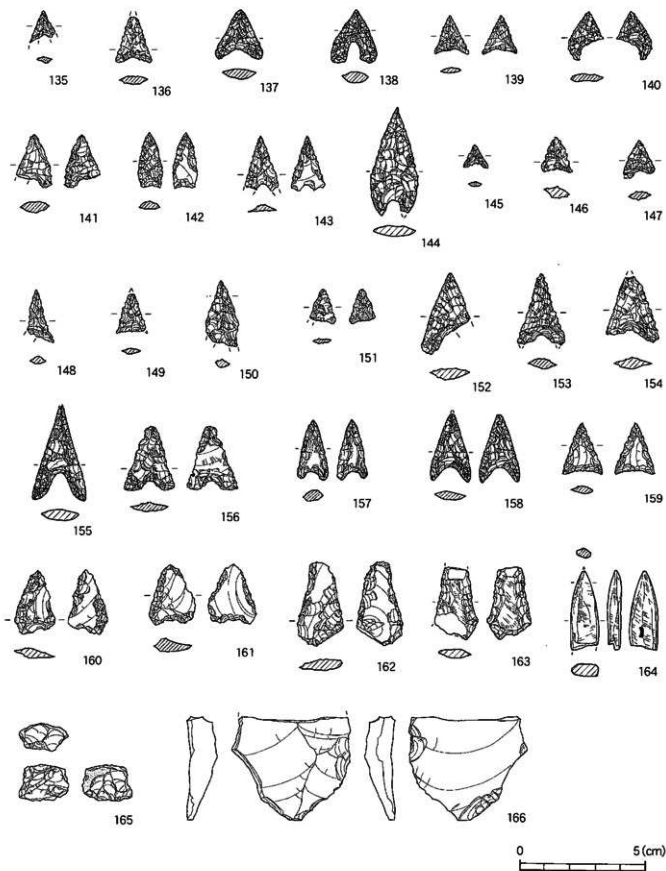
165は桑ノ木津留産黒曜石製の石核である。一部に自然面を残す。石核はこの他に図示していないが尾鈴山酸性岩製の資料が1点出土している。166は流紋岩製のスクレイパーである。上半部を欠損する。背面右側縁及び下端部に刃部加工が施されている。剥片・碎片は164点出土している。そのうちの2点(167・168)を図示した。167は流紋岩製で下縁部以外の箇所二次加工を施している。168は背面左側縁に微細剥離が確認される。剥片類の内訳は頁岩(14点・169.6g)・流紋岩(16点・136.5g)・チャート(49点・150.2g)・砂岩(9点・277.9g)・安山岩(2点・2.3g)・玉髓(3点・49.4g)・桑ノ木津留産黒曜石(50点・45.9g)・姫島産黒曜石(18点・37.9g)・日東産黒曜石(1点・4.3g)・ホルンフェルス(1点・2.1g)珪質岩(1点・27.1g)という状況である。

169は局部磨製石斧である。砂岩製で研磨は基部以外の全ての部位で行われているが、体部の研磨はあまり顕著ではなく、剥離面の稜線をわずかに鈍くする程度である。一方刃部付近の研磨は入念に行われており、剥離面の痕跡をほとんど残していない。170はホルンフェルス製の石器である。該当する器種は不明だが一端を尖らせているので一応尖頭状石器として報告しておく。おそらく板状の礫を素材とし、両側縁からの加撃により全体の形状を作り出している。片面の稜線はかなり不明瞭となっているが、もう一面の先端部付近の稜線ははっきりと確認することができる。風化が著しいため、研磨が行われたかどうかは不明である。規模や体部の調整方法に注目すると石斧からの転用品の可能性もある。

敲石・磨石は全て砂岩製であり、全部で7点が出土した。そのうちの3点(171~173)を

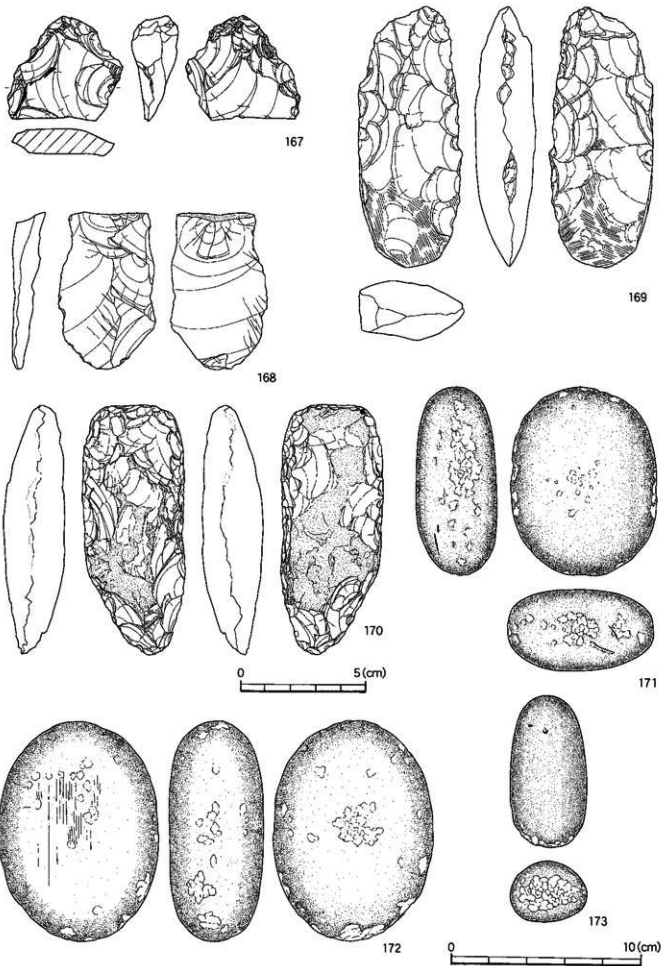


第32回 縄文時代早期遺物包含層出土主要石器分布図(S=1/250)



第33図 縄文時代早期遺物包含層出土石器実測図①(S-2/3)

図示している。171・172は砂岩の円礫を素材とするもので表面及び側面に敲打の痕跡が確認される。また172には研磨痕も観察される。173は棒状の砂岩礫の端部に使用痕が観察されるものである。



第34圖 縄文時代早期遺物包含層出土石器実測図②(S-2/3・1/2)

第8表 縄文時代早期包含層出土石器計測分類表

遺物 No.	実測 No.	出土 グリット	層位	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
135	22	D 2	VI	石鏃	チャート	(1.25)	(0.9)	0.3	(0.2)	脚部欠損
136	20	C 3	V	石鏃	チャート	(1.75)	1.45	0.3	(0.6)	先端部欠損
137	68	C 3	VI	石鏃	チャート	1.9	1.9	0.4	0.7	
138	67	D 2	VI	石鏃	チャート	(2.05)	(1.85)	0.45	(1.1)	鍔形鏃、脚部欠損
139	4	C 2	VI	石鏃	チャート	1.5	1.4	0.2	0.3	
140	40	D 2	VI	石鏃	チャート	1.9	(1.35)	0.3	(0.6)	脚部欠損
141	42	C 3	V	石鏃	チャート	2.1	(1.4)	0.4	(1.1)	脚部欠損
142	31	C 4	VI	石鏃	チャート	2.15	0.95	0.35	0.7	粘地型石鏃?
143	32	D 2	VI	石鏃	チャート	(2.15)	(1.3)	0.2	(0.6)	脚部欠損
144	69	-	VI	石鏃	チャート	(4.25)	1.95	0.4	(2.7)	先端部、脚部欠損
145	15	C 2	VI	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	0.9	0.95	0.1	0.1	
146	13	C 2	V	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	1.3	1.2	0.45	0.5	
147	14	C 2	VI	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.45)	(1.2)	0.35	(0.4)	脚部欠損
148	16	C 2	VI	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	(2.05)	(1.05)	0.3	(0.4)	脚部欠損
149	19	C 3	V	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.5)	(1.2)	0.25	(0.3)	先端部、脚部欠損
150	18	C 3	V	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	(2.6)	(1.3)	0.3	(1)	粘地型石鏃、脚部欠損
151	30	C 2	V	石鏃	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.4)	(1.05)	0.15	(0.2)	脚部欠損
152	28	-	VI	石鏃	黒曜石(針尾)	(3.2)	(1.8)	0.45	(1.8)	脚部欠損
153	21	D 2	V	石鏃	黒曜石(短島産)	(2.8)	(1.85)	3.9	(1.3)	脚部欠損
154	26	D 3	V	石鏃	安山岩	(2.6)	2	0.45	(1.6)	先端部欠損
155	70	C 2	VI	石鏃	サヌカイト	(3.8)	2.05	0.4	(1.9)	先端部欠損
156	33	D 2	VI	石鏃	サヌカイト	2.5	2	0.35	1.3	
157	64	D 3	V	石鏃	頁岩	2.35	1.2	0.5	0.9	表面に光沢有り
158	66	C 4	V	石鏃	頁岩	(2.65)	1.6	0.3	0.9	先端部欠損
159	34	C 2	VI	石鏃	砂岩	2	1.55	0.3	3.2	
160	29	C 2	V	石鏃未製品	頁岩	2.5	1.6	3.9	1.4	
161	5	D 2	V	石鏃未製品	頁岩	2.4	1.8	0.5	1.9	
162	41	C 3	V	石鏃未製品	頁岩	3.3	1.8	0.45	2.6	
163	202	D 3	V	局部磨製石鏃	頁岩	(2.85)	(1.7)	0.3	(1.4)	先端部、脚部欠損
164	201	C 2	VI	磨製石鏃?	粘板岩	(3.1)	(1.1)	(0.6)	(2.2)	下半部欠損
165	7	C 2	V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.4	1.95	1.1	2.7	
166	38	C 3	V	スクレイパー	流紋岩	(4)	(4.7)	(1.15)	(19.5)	上半部欠損
167	63	D 2	V	剥片	流紋岩	4	4.6	1.9	21	
168	39	C 3	VI	剥片	頁岩	6.05	3.9	1.3	23.9	
169	1	C 2	V	磨製石斧	砂岩	10	4	2.3	112.2	
170	8	D 2	VI	尖頭状石器?	ホルンフェルス	9.75	5.05	2.45	130	
171	9	D 4	V	敲石	砂岩	9.8	7.7	4.25	448	
172	10	C 3	VI	敲石	砂岩	11.6	8.45	5	650	磨痕跡有り
173	11	C 2	VI	敲石	砂岩	8	4.05	3.25	133.3	

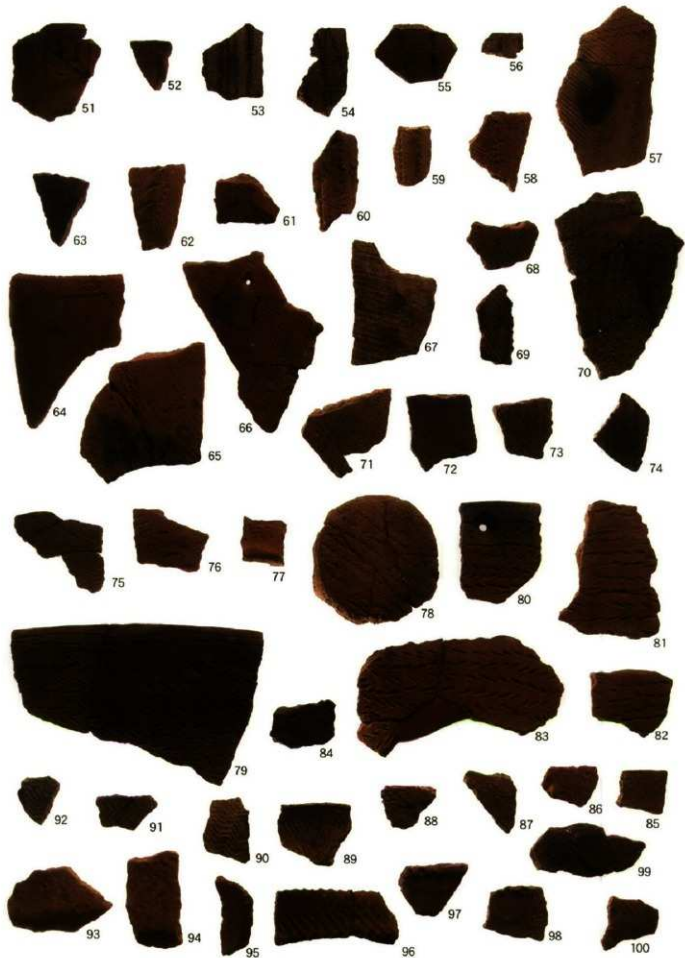
()内の数値は残存値を示す



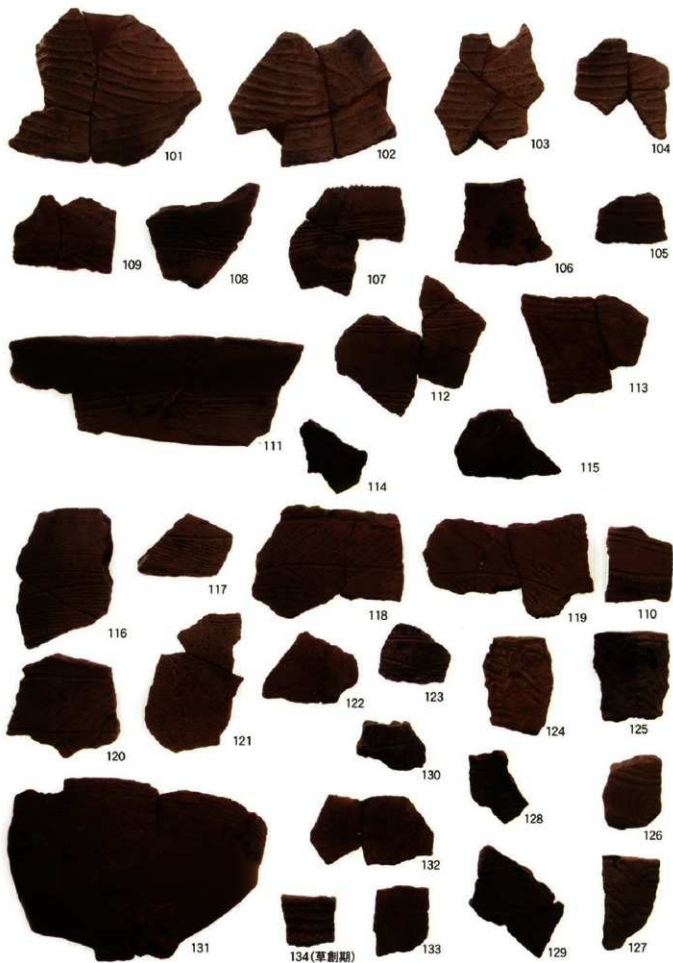
圖版40 縄文時代早期遺物包含層出土土器①



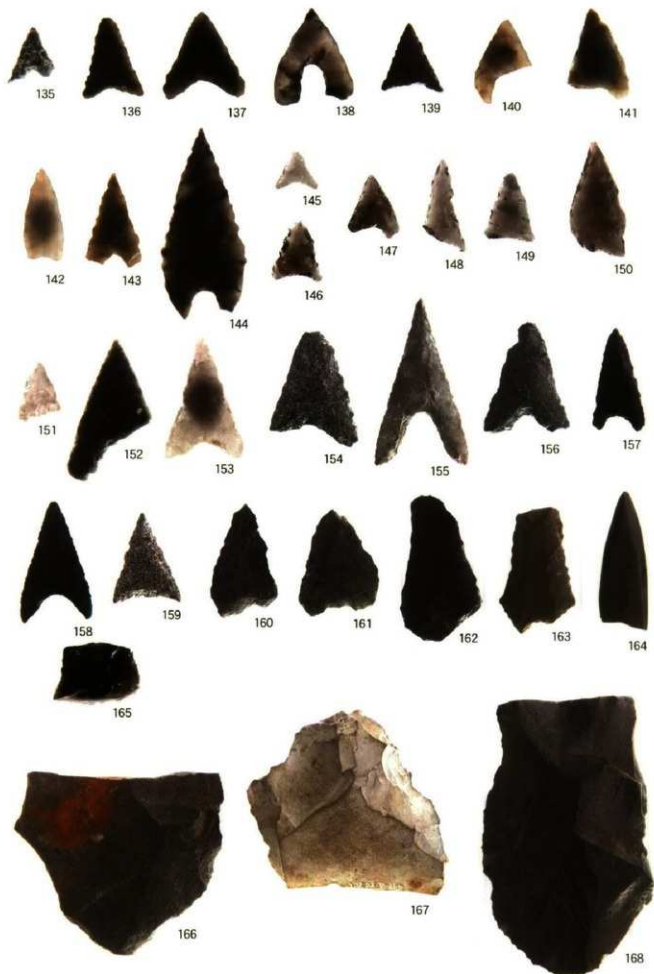
図版41 縄文時代早期遺物包含層出土土器②



図版42 縄文時代早期遺物包含層出土土器③



図版43 縄文時代早期遺物包含層出土土器④



圖版44 繩文時代早期遺物包含層出土石群①



169



170



173



172



171

圖版45 繩文時代早期遺物包含層出土石器②

山田第2遺跡と坂元遺跡における炉穴の比較

今回、このまとめの章では、山田第2遺跡で検出された炉穴2基(SC-68・75)と、坂元遺跡で検出された炉穴2基(SC-3・9)、計4基の詳細について比較検討を行いたいと思う。(山田第2遺跡の炉穴について実施した自然科学分析の結果についてはP68・69参照。又、これ以後は、山田第2遺跡を「YD2」、坂元遺跡を「SM」と略記号で表している。)

放射性炭素年代測定の結果をもとに4基を古い順に並べると、SC-3(SM)⇒SC-68(YD2)⇒SC-75(YD2)⇒SC-9(SM)となる(第9表参照)。この使用時期の推移を踏まえながら、幾つかの注目点について比較検討していきたい。

まず、立地条件についてであるが、4基全てが緩斜面を利用している。炉穴の向きについては、いずれも長軸方向が斜面に直行する向き(足場が下で煙出口が上)に構築されていて、緩斜面をうまく利用して効率的に構築されていることがうかがえる。但し、SC-3などは斜面と平行に構築されている炉穴と切り合っており、季節によって風向き等を巧みに利用しながら燻すための煙を煙道へと導いていたことが推測される。いずれにせよ立地条件及び構築される向きについては、この4基に時期的な違いはほとんど確認できない。

次に、プランであるが、これは平面プランと床面の傾斜、以上2点で検証を進めていきたい。まず平面プランについては、SC-3(SM)・SC-68(YD2)・SC-75(SM)は長楕円形を呈していて、短軸方向の幅についても足場と煙出口が皆ほぼ同じである。それに対し最も新しいSC-9(SM)は舟形を呈していて、煙出口へ向けてやや尖り気味になっている。次に床面の傾斜については、SC-3(SM)・SC-68(YD2)はほぼ水平で、SC-75(YD2)は足場から燃焼部にかけてわずかに下り傾斜、SC-9(SM)は足場から燃焼部にかけて下り傾斜である。以上の点からみて、「平面プランは長楕円形から舟形へと変化し、床面については水平から燃焼部にかけての下り傾斜へと変化していった」という仮説が成り立つ。但し、SC-75(YD2)とSC-9(SM)の使用時期には600年という時期差があるので、先述の変化が次第に移行したものなのか、それともSC-9(SM)の使用時期に突然おきたものなのか、あるいはSC-9(SM)だけが特異な炉穴なのか、4基のみの検証では不十分なため、今後整理される資料を加えながらこの仮説についての検証を深めていきたい。

最後に、炉穴が検出された付近における包含層出土土器の傾向にふれておきたい。山田第2遺跡と坂元遺跡では、縄文時代早期の土器が多数出土しているが、これらは貝殻文系、押型文系、平楯式系、塞ノ神式系、貝殻条痕文系に大別できる。この土器群と炉穴との関係を見てみると、SC-3(SM)・SC-68(YD2)・SC-75(YD2)が検出された調査区では貝殻文系の土器が60%以上を占めるのに対し、SC-9(SM)の検出された調査区では押型文系が53%を占める。つまり、縄文時代早期前葉から中葉に使用したと推測される炉穴付近では貝殻文系が多く出土し、縄文時代早期中葉に使用したと推測される炉穴付近では押型文系が多く出土する、という傾向がみられたわけである。今後も包含層出土土器の出土割合が、自然科学分析の結果の精度をより高める資料と成り得るように、細部に注意して整理作業を進めていきたい。

第9表 炉穴比較表(山田第2遺跡・坂元遺跡)

遺跡名	山田第2遺跡		坂元遺跡		
			E区	B区	
遺構No	SC-68	SC-75	SC-3	SC-9	
立地	北向きの緩斜面 (標高99m)	南向きの緩斜面 (標高98.75m)	南西向き緩斜面 (標高84.75m)	東向き緩斜面 (標高79.25m)	
検出状況	単独	単独	他の炉穴とはほぼ直行して切りあう状態で検出	集石遺構と切りあう状態で検出。周辺には7~8基の炉穴が存在した。	
遺構の向き	足場⇒煙出口が北⇒南 (長軸方向が斜面にほぼ垂直)	足場⇒煙出口が南⇒北 (長軸方向が斜面にほぼ垂直)	足場⇒煙出口が南西⇒北東 (長軸方向が斜面にほぼ垂直)	足場⇒煙出口が東⇒西 (長軸方向が斜面にほぼ垂直)	
推定使用時期	9270±50年BP	8900±50年BP	9440±50年BP	8290±40年BP	
プラン	平面	2.48m×1mの長楕円形。 短軸方向の幅については煙出口と足場がほぼ同じ(やや煙出口の方が広め)。	2.18m×0.8mの長楕円形。 短軸方向の幅については煙出口と足場がほぼ同じ。	3.18m×0.8mの長楕円形。 短軸方向の幅については煙出口と足場がほぼ同じ。	2.02m(+) ×1.32mの舟形。 短軸方向の幅については煙出口が足場よりも狭くなっている。
	壁面	深さは0.55m。 壁面の立ち上がりは、短軸方向はほぼ垂直。それに対し長軸方向はやや緩やか。	深さは0.62m。 壁面の立ち上がりは、短軸方向はほぼ垂直。それに対し長軸方向はほぼ緩やか。	深さは0.5m。 壁面の立ち上がりは、短軸方向はほぼ垂直。それに対し長軸方向はほぼ緩やか。	深さは0.7m。 壁面(短軸のみ)の立ち上がりについては垂直気味に立ち上がっている。(煙道も斜め)。
	床面	ほぼ水平	足場から燃焼部にかけてわずかに下り傾斜。最深部は燃焼部。	ほぼ水平	足場から燃焼部にかけて下り傾斜。最深部は燃焼部。
ブリッジ	残存	無し(くびれのみ)	残存	無し(くびれのみ)	
焼土	無し	燃焼部に残存	足場に一部残存	燃焼部に残存	
遺構内遺物	無し	貝殻内筒形土器	ほぼ無し	下割釜式土器 押型土器	
包含層出土土器の傾向	貝殻文系65% 押型文2.5% 平埴2.5% 壺ノ神27% 貝殻条痕系3%		貝殻文系63% 押型文18% 壺ノ神19%		貝殻文系22% 押型文53% 壺ノ神25%

*使用推定時期については、炉穴の埋土から採取された炭化材についての放射性炭素年代測定値を表記している。

*包含層出土土器の傾向については、縄文時代早期遺物包含層から出土した土器で、分類可能な主な土器形式で算出したもので、全ての出土土器についてのデータではない。

桑ノ木津留産黒曜石の利用について

前述のとおり、本遺跡の縄文早期の遺物包含層から出土した土器は貝殻文系土器が60%以上を占めている。さらに調査区の南東部においてはその貝殻文系土器の分布が集中している。同様の分布状況を示す石器としては桑ノ木津留産黒曜石製の石鎌が挙げられる。

本遺跡において貝殻文系土器の分布と桑ノ木津留産黒曜石製の石鎌の分布は重なるものであり、桑ノ木津留産黒曜石の利用は貝殻文系土器の時期に特徴的に見られるものと理解できるだろう。しかし、調査範囲が狭い点、石材鑑定が肉眼観察による点、貝殻文系土器の分布が完全に他の土器の分布と離れていない点などの問題点が存在する。

本遺跡と同じ台地上に立地する坂元遺跡B・E区、山田第一遺跡G区の西側では貝殻文系土器や押型土器が集中して出土している。この2つの遺跡でも桑ノ木津留産黒曜石製の石鎌の出土地点はこれらの土器の分布とおおむね重なるという様相を示している。

このような3つの遺跡の状況から、船引地区遺跡群における桑ノ木津留産黒曜石の利用は縄文早期の前葉～中葉にかけて特徴的に見られる現象であるという仮説が立てられるだろう。これからの船引地区遺跡群の整理作業を進めていく上でこの仮説の検証作業を続けていきたい。

I. 山田第2遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点	遺構	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	YD 2	SC-68	炭化物	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 2	YD 2	SC-75	炭化物	酸-アルカリ酸洗浄, 石墨調整	AMS

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

2. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代(西暦) (1 σ : 68% 確率, 2 σ : 95% 確率)
No. 1	202900	9300 ± 50	-26.7	9270 ± 50	交点: cal BC 8530 1 σ : cal BC 8580-8440 2 σ : cal BC 8620-8310
No. 2	202901	8930 ± 50	-27.1	8900 ± 50	交点: cal BC 8180, 8040, 8010 1 σ : cal BC 8220-7970 2 σ : cal BC 8240-7930

(1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

(3) 補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を校正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された校正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率)と2 σ (95% 確率)は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の

交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

文献

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫(1999)放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 山田第2遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、縄文時代早期の炉穴から採取された炭化材2点である。

3. 方法

試料を割折して炭化材の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ブナ科 Fagaceae

横断面:部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られる。放射断面:放射組織は平伏細胞からなる。接線断面:放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料が小片で保存状態が悪いことから、ブナ科の同定にとどめた。

文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296

表1 山田第2遺跡における樹種同定結果

遺跡名	遺溝名	炭化物No.	結果(学名/和名)
YD2	SC-68	Fagaceae	ブナ科(クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか)
YD2	SC-75	Fagaceae	ブナ科(クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれか)

調査抄録

フリガナ	ヤマダ ダイニ				
書名	山田第2遺跡				
副書名	県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第20集				
編集者名	井田篤・秋成雅博				
発行機関	清武町教育委員会				
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地				
発行年月日	2006年3月				
所在遺跡名	所在地	市町村:遺跡番号	北緯	東経	調査期間
山田第2遺跡	清武町 大字船引字山田	清武町:208(2)	31° 52' 22" (日本測地形)	131° 22' 24" (日本測地形)	99.428 ~ 00.330
調査面積	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
4,300㎡	農業関連	集落	縄文(早期) 弥生~古代	集石遺構 陥し穴 炉穴 など	石器 縄文式土器 など
特記事項					

清武町埋蔵文化財調査報告書 第20集

山田第2遺跡

県営農地保全整備事業船引工区にかかる埋蔵文化財調査報告書

発行年月日 平成18年3月29日

編集発行 清武町教育委員会
〒889-1696 宮崎県宮崎郡清武町大字船引204
TEL 0985-85-1111

印刷 有限会社 ネットビジョン
〒889-1604 宮崎県宮崎郡清武町大字船引644-62-1F
TEL 0985-84-4111
